

学校と社会を結ぶ音楽教育

～ TAS モデルの意味を問う ～

坪能 由紀子

1 学校と社会を結ぶ新たな視点を求めて

2017年に改定された学習指導要領では「チーム学校」や「社会に開かれた教育課程」の重要性が謳われ、学校と社会との連携に焦点が当てられている。音楽においては、2000年代に入った頃から、すでにプロの音楽家や音楽団体、あるいは公共文化施設などが多くの教育プログラムを展開し、学校における支援活動を広げてきている。しかしこうした活動では、学校側が主体的にプログラムに参加すること、あるいは音楽の教師たちが積極的に関わる場を見ることは少ない。あくまで演奏者、あるいは様々の社会的な団体主導のイベントとして行われているのである（図1）。

また活動の内容も、教科書の鑑賞曲を演奏するなど以外は、学校の音楽科教育、あるいは学習指導要領と直接つながる内容は多いとは言えない。つまり学校が様々な社会的な団体と関わりを持っているといっても、それが音楽の授業を中心とした学校の教育課程に結びついていることはほとんどないのである。

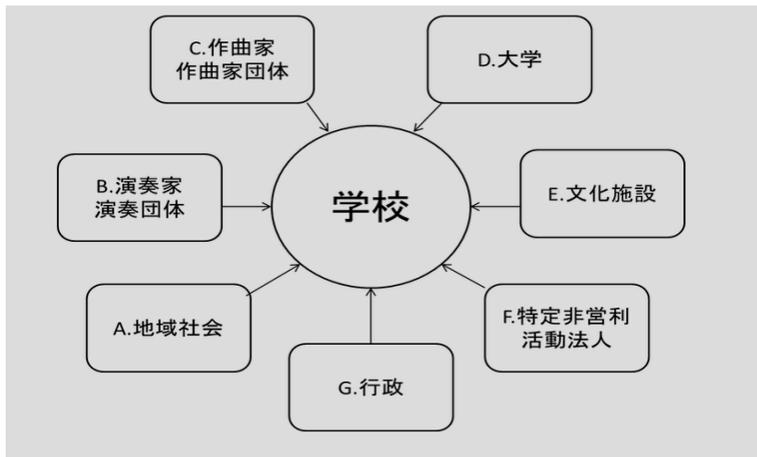


図1 様々な社会的団体から学校へのこれまでの主な支援の形

2 TAS モデルの提案

こうした現状をふまえ、筆者は教師と子ども、学校が主体的に関わることのできる、しかも学校外の人々または組織からの支援を得ることのできる実践のあり方を模索することが大切であると考え、2017年から「学校と社会を結ぶ音楽教育」というタイトルの共同研究を立ち上げ、ここでの T (Teacher=教師) と、授業を様々な形で支援する A (Adviser), S(Supporter)の関係を「TAS モデル」と名付けた。

これまでの学校と社会との連携では、子どもをもっともよく知る教師が参加しない場合や、音楽家にリーダーシップを委ねて自らは脇役にまわることもあるなど、その役割は不明確であった。

そこで本研究では社会的な支援を受ける際の、教師の役割を明確化するために、

T=Teacher を授業者として位置づけ、

A=Adviser としての音楽の専門家（研究者や作曲家等）の知見をもとに、

S=Supporter として授業を自らの音・音楽によって支える演奏家の参加

という 3 者の協働による新たな授業のあり方を成立させる試みとして、TAS モデル（図 2）を提案したのである。

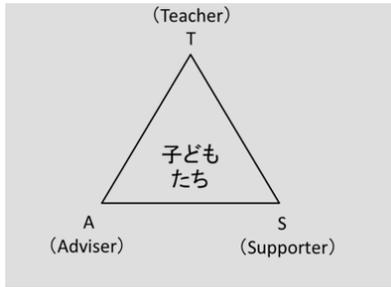


図 2 TAS モデル

本誌「音楽の授業づくりジャーナル」2号は、2017～19年の3年にかけて日本音楽教育学会の常任理事会企画の「プロジェクト研究」として実施されている「学校と社会を結ぶ音楽教育」の基礎となった実践を集めたものである。2017年の第48回愛知大会では、学校と社会に様々な形で関わっている3人の音楽教育研究者、加藤富美子（東京音楽大学）、熊倉純子（東京芸術大学）、塩原麻里（国立音楽大学）とシンポジウムを行った。2018年2月からはこのシンポジウムでの議論に基づき、地域的には青森から東海、四国、九州にかけて、校種としては幼稚園～高等学校までを対象として、10数回の実践が行われた。これらの実践を背景として生まれた TAS モデルは、2018年の第49回岡山大会の「プロジェクト研究」のシンポジウムで提案された。

3 「音楽の授業づくりジャーナル」2号の発刊にむけて

日本音楽教育学会の「プロジェクト研究」がこのように幼稚園から高校までの様々な校種の協力のもとに、広範な実践を伴って行われたことははじめてのことであろう。また、この「プロジェクト研究」は、音楽教育学の実践と研究の架け橋となりつつある、ということも指摘しておきたい。この研究には T, A, S の他に R(=Reporter)として音楽教育の研究者が加わり、実践後それぞれの立場で本誌にレポートを書くという形を取っているのである。この研究に関わった人の数は T, A, S, R を併せると、2019年5月の時点で100人を超えている。

「音楽の授業づくりジャーナル」2号ではそのうち、2018年2月～6月に行われた5つの実践について主に報告している。

本誌は音楽に関わる Web ジャーナルだからこその特徴を持っている。すなわち動画、録音などを資料として掲載することが可能なのである。肖像権などが関わるため、関係者に掲載のお願いをし、その結果、許可を得ることができたものはわずかであるが、貴重な動画や映像を、ぜひ参考にさせていただければと思う。

このような背景をもって行われた実践を、本誌で詳細に紹介できることは、本研究に関わるものとして大きな喜びとするところである。この「プロジェクト研究」に参加してくださった T, A, S, そして R, それぞれの役割を担ってくださった方々に深い感謝の意を捧げるとともに、音楽教育に様々な形で関わっている方たちのこれからの実践や研究に、このジャーナルが少しでも役立つことを願っている。

表1 本誌2号に掲載されている実践

	月日	テーマ	場所	校園	T	A	S	R
1	2.22	ブルースを楽しもう	埼玉県	小5	高橋めぐみ (専科)	駒久美子 味府美香	Morten Vatn, 遠藤尚美 (ジャズ演奏家)	味府美香
2	2.27	トーンチャイムを もとに音楽づくり を楽しもう	川崎市	小4	徳田崇 (専科)	佐藤昌弘 (作曲家)	洗足学園大学 学生4人	徳田崇
3	3.01	箏をもとに	栃木県	幼稚園	中山年江 手呂内幸代	早川富美子	國學院大學 栃木短期大学 講師1名 学生10名	藤村秀子
4	3.09	ことばリズムで つくろう ～トガトンを使って～	三重県	小1	坂野みどり (担任)	La Verne de la Pena (作曲家)	研究者6名	坪能由紀子
5	5.28	ミソラでつくろう	高知市	小5/6 複	堀内知佐乃 (担任)	前田克治 (作曲家)	前田克治 (作曲家)	金奎道*
6	6.15	さくらさくらを 広げよう	千葉市	小5	村越江利子 (専科)	吉原佐知子 (箏演奏家)	吉原佐知子 (箏演奏家)	早川富美子

* = 「高知大学学校教育研究」創刊号 2019年3月参照

< 目 次 >

●はじめに●

- ◎学校と社会を結ぶ音楽教育～TAS の意味を問う～ 1
- ◎本誌2号に掲載されている実践一覧表 3

<特集> TAS モデルの実践報告

- (1) ブルースの音楽を楽しもう 5
- (2) トーンチャイムをもとに音楽づくりを楽しもう 13
- (3) 箏をもとに 20
- (4) ことばリズムでつくろう～トガトンを使って～ 28
- (5) ミソラでつくろう (本誌には掲載していません)
- (6) さくらさくらを広げよう 39

●資料：

☆特集「TAS モデルの実践報告」(4) ことばリズムでつくろう の資料

- ・資料1 動画：6人のサポーターによる「ニナネン・ナーネン」の試奏
- ・資料2 音源：3グループの子どもたちによる、トガトンのための作品

第5学年 ブルースの音楽を楽しもう

Teacher	高橋 めぐみ
Adviser	味府 美香・駒 久美子
Supporter	遠藤 尚美・Morten J. Vatn 目戸 郁衣
Reporter	味府 美香

1. Teacher から 学習指導案（高橋 めぐみ）
2. Adviser から（駒 久美子・千葉大学）
3. Reporter から（味府 美香・東京成徳大学）

1. Teacher から 学習指導案

第5学年「日本と世界の音階の違いを楽しもう」

～ブルースの音階をもとにした音楽づくり～

実施日 2018年 2月 22日

埼玉県小学校 第5学年

授業者 高橋 めぐみ

1 題材の目標

○日本の音階と、世界の音楽の中から「ブルース」の音階を知り、音階の構成音を使って即興的に旋律をつくっている。

○日本の音階と、世界の音楽の中から「ブルース」の音階を知り、その音階が生み出すよさや面白さなどに関わらせて音やフレーズのつなげ方や重ね方を即興的に工夫し、音楽づくりの様々な発想をもつ。

○友達と試行錯誤しながら、即興的に表現する活動を通して、音楽をつくる喜びを味わうとともに、多様な音階に関心を広げる。

2 題材の意義

日本の音楽に使われている音階と、世界の音楽に使われている音階の中から「ブルース」を体験し、違いを楽しむようにする。ブルースに用いられている「ブルーノートスケール」に触れることで、日常の身近な曲にもこの音階が使われていることを知り、音楽観が広がるようにしたい。

3 育てたい児童・生徒の姿

学期ごとに歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞とバランスよく取り組んできた。打楽器を用いて音を音楽へと構成する活動や、声を用いて「なんちゃってケチャづくり」も行った。

ここでは、即興的に表現することを通して、音楽づくりの様々な発想を得ることを中心として、音階の多様性を感じ取るようにしたい。

4 教材について

「C JAM ブルース」

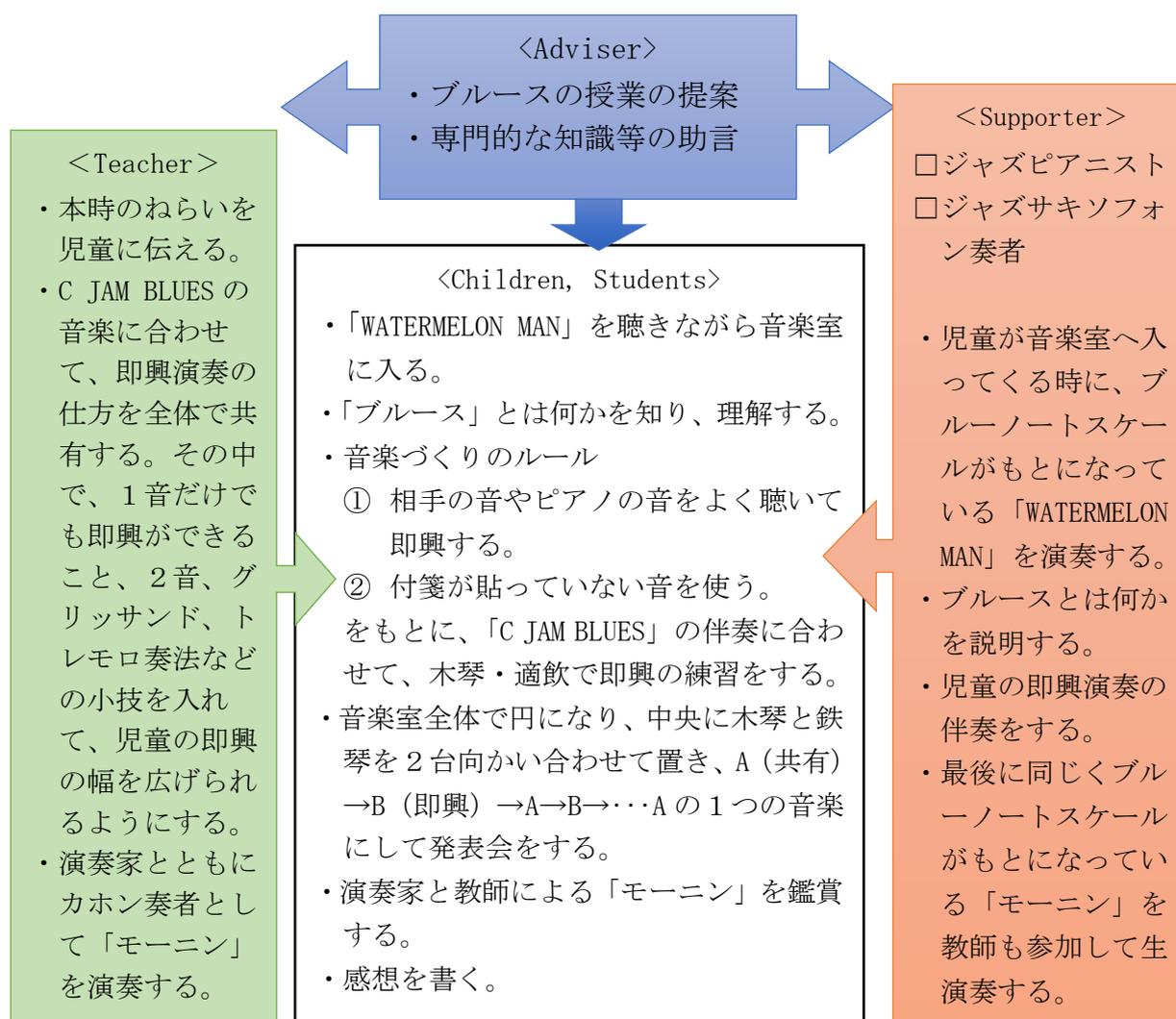
本教材は、4拍子16小節の曲である。4拍子であるため、児童が拍を感じ取りやすい。また、ブルースの音楽は12小節がまとまりとなっていることが基本であり、12小節間を児童が即興し、残りの4小節をブレイクの間としてその間に児童が演奏する人の交代できるといった面でも、取り扱いやすい教材と考えた。

5 事前・事後の指導と本時の指導

(1) 事前の指導と実際

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
<p>○日本の音階をつかって旋律づくりをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 木琴と鉄琴用いて、「ミ・ファ・ラ・シ・ド・ミ」で旋律づくりを即興で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の音階を知る。 鉄琴と木琴を叩くことに慣れる。 ピアノの伴奏をベースに、4拍子2小節間を自由に即興する。 木琴を叩く児童と鉄琴を叩く児童とで互いに音をよく聴きながら即興する。 	<ul style="list-style-type: none"> 即興とは何かを分かるように説明する。 相手の音やピアノの音をよく聴いて即興できるように指導する。 いろいろなリズムパターンや重なり方を、児童から引き出して、全体に共有できるようにする。

(2) 本時



2 Adviser から

Adviser 駒久美子 (千葉大学)

1 教材の提案

本授業で用いられた教材は、Duke Ellington (デューク・エリントン) 作曲「C JAM BLUES (シージャムブルース) (1942 年) である。ブルースとは、「アフロ・アメリカの音楽活動から生まれた中で、現在なおもっとも一般的な音楽形式で、ジャズやラップの発展において大きな役割を果たして」おり、「ブルー (憂鬱という意味) という言葉に白人がこめたような性格付けとは逆に、センチメンタルなところがない直接的で具体的な音楽」を指す¹⁾。12小節で、主要三和音による進行を基本とし、ブルー・ノートスケールが用いられることが特徴である。シージャム・ブルースも、12小節でできており、そのコード進行は次の通りである。【in C, 4/4 拍子】

C7 - - - | F7 - - - | C7 - - - | C7 - - - |
F7 - - - | F7 - - - | C7 - - - | A7 - - - |
Dm7 - - - | G7 - - - | C7 - (A7 - | Dm7 G7) ||

4小節をひとまとまりとして、「呼びかけ」「呼びかけの繰り返し」「応答」で構成される。

基本のメロディは、「ド」と「ソ」のたった2音だけであり、バウンスと呼ばれる、弾むようなリズムをもつ。そのシンプルさ故に、様々なアドリブが繰り返されられた名演奏が数多くある。

一般的なブルー・ノートスケールは、長音階の第3音、第5音、第7音を半音ずつ下げた音を加える。また、マイナー・ペンタトニックスケールにb5音を加える場合もある。

2 Supporter の紹介

ジャズピアニストの遠藤尚美は、3歳からピアノを始め、幼少よりコンクールなどに出場、音楽高校時代から演奏活動を行い、大学入学と同時に都内各地でクラシックからジャズまで幅広い音楽活動を行った。大学卒業後は、銀座山野楽器店他、都内主要楽器店においてクラシック・ポピュラーピアノ、キーボードの講師を務めながら、演奏活動や、音楽出版物の執筆に携わってきた。その後、ジャズピアノの勉強のためボストンのバークリー音楽院に留学し、ジャズピアノ演奏技術やアレンジ、コンピューターミュージックなどを学んだ。帰国後は専門学校の講師就任を機に日本でアレンジや演奏活動を再開している (以上、公式HP²⁾ より抜粋)。本授業では、ジャズ・ピアニストとして、子どもたちの音楽活動づくりを支えたり、子どもたちに生の鑑賞教材を提供したりする役割を担っている。

Morten J. Vatn (モーテン・ヴァテン) は、ノルウェー、オスロの生まれで、オスロ国立音楽大学卒業後、グリークアカデミー音楽大学院と東京藝術大学院音楽研究科を修了。3年間オスロ大学楽理科教員を務めた。専門領域はサウンドレコーディング、音楽教育、ポピュラー音楽史、作曲、民族音楽学、音楽ワークショップ、創造的音楽学習と多岐にわたる。ノルウェー民族音楽界・ジャズ界・ヒップホップ界において、プロデューサーとして (Sony, Mo' Jazz, City

Connections), 奏者として(ピアノ, ベース, サックス, 様々な民族楽器), またイベント企画者として(Mon Music)活動し, ノルウェーで最も権威ある音楽賞「スペレマンプリセン」のクリエイター賞に二度優勝, ゴールドディスク大賞も受賞している。現在, 東京のインターナショナルスクール校長で, 音楽主任教諭である(以上, 公式HP³⁾より抜粋)。本授業では, サックス奏者として, 子どもたちの音楽づくりを支えたり, 子どもたちに生の鑑賞教材を提供したりする役割を担っている。

さらに, 明治学院大学大学院博士課程に在籍する目戸郁衣は, 打楽器奏者として, カホン(直方体の木製打楽器)を用いて音楽全体を支える役割を担っている。

3 授業への提案

Adviserの駒と味府は, これまでいくつかのブルースを用いた教材開発を行ってきた⁴⁾。高橋教諭は当初, これらの教材から『みんなピアノだい好き!』で提案した, H, マンシーニ作曲「ピンクパンサー」のテーマをもとにした授業開発を検討していた。しかし, 「ピンクパンサー」のテーマは, マイナーブルーススケールであり, 初めてブルースに触れる子どもにとって少し難しい教材であったことに加え, 「ピンクパンサー」の曲本来のイメージに, 子どもたちが囚われてしまい, オリジナルな音楽づくりが進まなくなるのではないかという懸念があることなど, Supporterの遠藤やMortenらとも相談して, 誰もがわかりやすく, また基本のメロディも「ド」と「ソ」の2音だけで, テーマソングとしても真似しやすいため, 「C JAM BLUES」を用いることとなった。

【注】

1) 大角欣矢・長木誠司・野本由紀夫監修『メッ

ソラー音楽大事典』教育芸術社, 日本語デジタル版(DVD-ROM)より, 「ブルース」参照。

- 2) Naomi Endo's Official Web Site
<http://naomi-piano.com/works.html>
(2019/2/6 アクセス)
- 3) ノルカル TOKYO Official Website
<https://www.norkul.com/> (2019/2/6 アクセス)
- 4) 坪能由紀子監修による『一人ひとりの表現を生かすⅡ 新学習指導要領にもとづく小学校音楽づくり7のアイデア集』(2010年, 教育出版)において, 「循環コードを使った音楽づくりーブルースのコードと音階を使ってー」(pp. 39-45)を提案。ここでは教材として「タコのブルース」(新沢としひこ作詞/中川ひろたか作曲)と, 「Shake」(Sam Cooke作曲)を用いた。また, 坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞見子・中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府美香共著による『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』(2012年, 音楽之友社)では, 「ブルースの音階であそぼう」(pp. 70-72)で, C・F・Gの主要三和音による伴奏形でブルースの音階を使ってメロディをつくる音楽づくりを提案した。さらに, 坪能由紀子・味府美香・片岡寛晶・木下和彦・駒久美子・早川富美子共著による『みんなピアノだい好き!』(2016年, 全音楽譜出版社)では, 「ブルースの音階でつくってみよう」(pp. 145-147)において, 「ピンクパンサー」(H, マンシーニ作曲)のアイデアを使った音楽づくりを提案している。

3 Reporter から

Reporter 味府美香（東京成徳大学）

1 授業記録

導入

(1) いつもと違う音楽の世界への誘い

「お願いします」という教師の一言でサクソプレイヤーとピアニストによる WATERMELON MAN の演奏が始まる。いつもとは一味違う雰囲気音楽室に、入ってくる子どもたちは一瞬立ち止まり、左を向いては我に戻って前へ進む。子どもたちの向く視線の先は演奏家で、子どもたちのワクワク感が伝わってくる。

(2) 授業の目的（めあて）とブルースについて

①今日の授業の目的（めあて）、「ブルースの音楽を楽しもう」が教師から伝えられる。すると、期待のそわそわ感が一転、子どもたちがざわつきはじめる。そのざわつきを教師は待っていたかのように、ブルースについての説明へとつなぐ。

②ブルースについての解説は、教師ではなくピアニストから行われた。専門的な見地からのブルースの面白さ、それが子どもたちに分かりやすく説明されていた。

展開

(3) 本時の中心的な活動

①即興ルールの共有

本時の活動は、音楽を即興的につくること、そのつくり方のルールは、前時までに取り組んでいた日本の音を使っての即興と同じであることの確認がされた。

②即興的な活動の例示

子どもたちの円の中にマリimbaとビブラフォ

ンが置かれ、即興的な活動を子どもたちがスムーズに行うことが出来るよう例示が行われた。また、その際（これ以降の即興の活動では常に）、ピアニストが子どもたちの即興のベースを、サクソプレイヤーはブレイクを演奏して子どもの活動を支えている。

<T>ブルーノートスケールの音をたたく→即興のルール（1人が8拍ずつで交代×3回）を共有→即興の例を、教師と子どもとで音を出しながら行っている。

【1人目】

<T>Cのみ→<C 1>Gのみ→<T>Gのみ→<C 1>Gのみ→<T>GとC→<C 1>GとC

【2人目】

<T>C, E♭→<C 2>G, F→<T>G, F→<C 2>C, B♭, E♭…

【Tの例】：2音同時、スケールの上行や下行、2拍3連などの複雑なリズム、連打、低音や高音の行き来、和音、グリッサンドなど

<T>最初はブレイクごとに（=1人ずつ）止めて、どんな表現をしていたかを子どもたちに確認していたが、4人目くらいからはどんどん交代で音楽をつなげている。また、即興の間に手拍子や声を入れることも提案している。

③グループ活動

子どもたちは5グループに分かれて各グループで即興動を楽しむ。教師はそれぞれのグループをまわり、子どもたちの評価を行うとともに、交代だけではなく、お互いが同時に音を重ねることもOKなどの新しいルールを、様子を見ながら加

えていく。

④全員で即興を楽しむ

全員で円になった真ん中に木琴とグロッケンが並べられ、教師の「どーぞ」というかけ声とともに即興の活動が2周（木琴とグロッケンの両方がまわるように）行われた。教師は子どもたちの演奏が終わると、うなずいたり声をかけたりなど、一人ひとりに評価をしていた。また、子どもたち同士の即興の中に、音楽教師&担任教師の即興が行われ、子どもたちが大いに盛り上がっていた。

⑤「Moanin'（モーニン）」の鑑賞

教師も演奏者の一人として打楽器（カホン）を担当。ブレイク的な目立つ繰り返しがあったり、その間にサクソやピアノのソロがあたりと、子どもたちが行った即興活動と似た構造を持つ作品であった。

2 考察

（1）Teacher について

①教師だからこそ

授業の導入から最後に至るまで、子どもたちが音や音楽そのものにのめりこんでいる様子が3クラスともに見られた。これは、子どもたちと常に音楽活動を行っている教師だからこそ、子どもたちをどうやって音楽に惹きこむか、何に疑問を持つのかなどの予測が出来るからである。それによって子どもたちの学びが深められていたと思われる。

②学校の授業であること

高橋教諭は、これまでのアウトリーチなどのような単発の授業ではなく、今回の活動を1年間の授業の中にどう位置づけるのかを明確に持っていた。「ブルースを楽しもう」は前回（日本の音を使った即興活動）の続きに位置付けられている。

つまり、学校に関わるということは、その時だけでなく、その前後にも子どもたちの学びがある

ことをしっかり認識しておくことが重要であることを再認識させられた。そして、このことがこれまでのアウトリーチでは大きく欠けていたのではないだろうか。

③音楽づくりのルールとアイデア

高橋教諭の音楽づくりのルールは、「相手の音を聴くこと（今回はピアノの音も聴くことが追加されていた）」である。音楽づくりのルールと言われると、どんな仕組みを使って、どんな見通しで音楽をつくるか、ということの思いがちだが、高橋教諭はそうではなく、「聴く」ことをルールとしていることは特筆すべき点であると思われる。また、即興の例として高橋教諭が示した演奏（（2）②）では、最初は丁寧に言葉も使いながら行っていたが、そろそろ子どもたちにもアイデアが浮かびそうかなという微妙なところで、説明はなく子どもに委ねている。グループ活動での介入（（2）③）でも、子どもの音の様子に合わせて、新しいアイデアだけではなく新しいルールも提示することで、子どもたちの意欲を常に保った状態をつくっていた。

（2）Children について

教師との信頼関係がよくとれており、特につくる活動が好きな子どもがたくさんいることが良く分かるほど、即興活動やお互いの音楽をつくりあったり、聴きあったりすることを楽しんでいた。

前時の日本の音を使った即興からのつながりがあったからこそ、今回のブルースの音がより浮き立って面白く、また音楽の構造に興味を持てたのではないだろうか。

（3）Supporter について

今回の演奏家は、演奏を聴かせるだけではなく、子どもたちの即興の活動時にも音楽的なサポートを行っている。ブルースは、循環コードがあり、比較的、パターンが決まってしまうば弾きやすい

と言うことも出来る。しかし、ピアニストの遠藤は、その循環コードを用いながらも演奏は常に変えているのである。それによって、全体に響く音楽が単調にならず常に新鮮さをもつとともに、音楽を盛り上げていた。サクソプレイヤーも同様に短いブレイク部分でさえ、変化をつけようとしていた。これは、演奏家だからこそその技であり、演奏家が学校に入る醍醐味の一つであると感じられた。さらに、鑑賞曲については、今回、高橋教諭と演奏家たちが協議を行って決定している。その曲は、子どもたちが行った即興の活動と構造が似ているが、全く同じではなく、少し違っているところがあること、そして、マイナーではなく、誰もが聴いたことのある曲を選曲してきたことは、やはり、その音楽のプロであるからこそそのアイデアであることを改めて感じさせられた。そして、こうした演奏家のアイデアは、教師が自分で持っている知識以上のことであったり、その音楽の膨大な情報量の中で探し切れない1つであったりするのではないか。つまり、演奏家からのアイデアを得ることが、教師にとってはその後の授業に何十にもアイデアとしていきっていくのではないだろうか。

3 まとめ

本事例を通して、学校に演奏家など学外の音楽に携わる人が入っていくことについて、改めて感じたことは、①「学校」の授業であることの意味を再確認すること、②教師と演奏家の役割についてである。前者は、学校と社会を結ぶ音楽教育において、これまでのような「面白い・良い音楽だから単発でも行う」のではなく、子どもたちの学校での日々の学びをつなげて行うことが重要なのであり、そのためには、学校の教師が授業を行う必要性、つまり、TASモデルの有効性が浮かび上がってきた。

後者②については、これまでのアウトリーチでの失敗も見てきたが、TASモデルの中での演奏家に着目してみると、その音楽のプロだからこそそのアイデアや、実際の演奏に子どもが動かされ、音楽がぐっと深まる瞬間を目の当たりにすると、やはり面白い活動であると実感した。

高橋教諭は本時の授業を経て、自分の音楽での人脈から、2018年度にもTASモデルでブルースの音楽の授業を展開していた。それは、本時のTASモデルが子どもにとっても教諭にとっても充実した学びであったことのあかしではないだろうか。

第5学年 トーンチャイムをもとに

Teacher 徳田 崇

Adviser 佐藤昌弘

Supporter 洗足学園音楽大学・音楽教育コース生

胃甲征也 木村文音 田中広輝 前田 望

Reporter 徳田 崇

1. Teacher から 学習指導案 (徳田 崇)
2. Adviser から (佐藤昌弘, 作曲家)
3. Reporter から (徳田 崇)

1. Teacher から 学習指導案

第4学年「トーンチャイムで音楽づくりを楽しもう」

教材「響きの波紋」佐藤昌弘作曲

実施日 2018年3月27日

参考曲「Voile (帆)」ドビュッシー作曲

川崎市立南百合丘小学校 第4学年

授業者 徳田 崇

1 題材の目標

○全音音階について知り、ドローン、オスティナート、メロディーなどの音楽の構造を意識して即興的な音楽づくりができる。

○つくった音楽を聴き合い、発音の仕方や組み合わせを考えて、よりよい表現に向けて工夫する。

○全音音階を使った即興的な音楽づくりを楽しむ活動を通して、友達同士で互いのよさを認め合いながら協力して一つの音楽を完成させる喜びを味わう。

2 題材の意義

トーンチャイムによる響きの受け渡しがこの学習の中心になるが、どんなタイミングで音を出しても増三和音としてきれいに響く全音音階を使うことで、音楽全体に統一感をもたせている。ドローンとオスティナートとメロディーで整った構造の音楽に支えられる中、主役として自由に友達とやりとりしながら響きをつくる楽しさを存分に味わえるようにしたい。

3 育てたい児童・生徒の姿

音楽づくりの活動にあまり慣れていない子どもたちでも、即興的で演奏技能に関わらない活動を通して、自分が出す音が全体の美しい響きをつくる一音になるという実感をもてるようにしたい。どんな音も認められる雰囲気の中で、こんな音にしたらどうだろうと考えたり、友達の音を受けてそれに応えるように音を工夫したりしながら、音楽的な思考が促されるようにする。

4 教材について

「響きの波紋」 佐藤昌弘 作曲

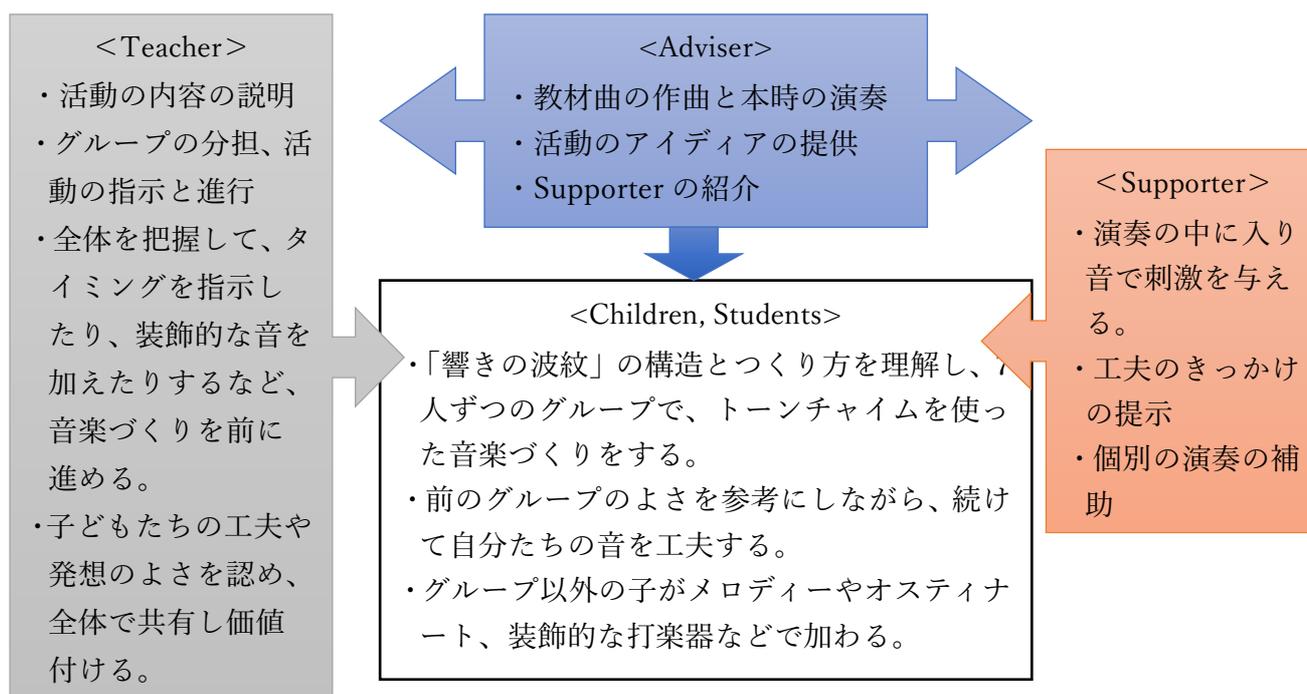
全音音階を素材とした音楽づくりのために作曲された教材。トーンチャイムのランダムな音の響きが波紋のように広がる中、ドローンとオスティナート、3種類のメロディーの断片がさまざまに重なり、その空間が全音音階の響きに満たされる。しっかりした構造をもちながらも、即興的に奏者の自由に任される部分が多いので、楽しく充実した音楽づくりの活動ができる。

5 事前・事後の指導と本時の指導

(1) 事前の指導と実際

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
<ul style="list-style-type: none"> ・ トーンチャイムを使って一定のルールをもとに協力して即興的に音楽をつくる。 ・ 全音音階について知り、ランダムに音を持って、自分なりの音の渡し方を考えて友達と音のやりとりをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幹音を一本ずつ持って、リーダーの指示で上行下行のグリッサンドやI、IV、Vの和音のアルペジオなどを鳴らす。 ・ 全音音階を一本ずつ持って、発音の仕方を工夫しながら音の受け渡しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ その場にその瞬間に生まれる即興的な音楽の面白さを意識できるようにする。 ・ 和音の響きの違いがよく感じられるようにする。 ・ お互いの音をよく聴き合っよさを認め合いながら、発想を広げられるようにする。

(2) 本時



(3) 事後の指導

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの「響きの波紋」の演奏と関連させながら「Voile」を鑑賞する。 ・ 全音音階のよさや即興的につくられる音楽の面白さについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドローンやオスティナートに注意して聴く。 ・ それぞれのグループで話し合い、ワークシートに感じたことやわかったこと、感想などを記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの演奏を振り返りながら、音楽の構造について意識できるようにする。 ・ 自分の演奏がもつ音楽全体の中の役割について考えられるようにする。

2 Adviser & Supporter から

Adviser 佐藤昌弘(作曲家、洗足学園音楽大学教授)

Supporters 洗足学園音楽大学・音楽教育コース生4

1 教材の提案

佐藤昌弘

学校教育の音楽づくり、創作において、「長短調以外の音階」が題材となることは、比較的多く見られることかと思えます。それは五音音階であったり、琉球音階であったり、ヨーロッパの教会旋法であったり、ジャズのブルーノート・スケールであったりすることでしょう。しかし「全音音階」を用いた音楽づくりというのは、あまり例を見ないのではないかと思います。これは今回のプロジェクトのお話があったとき、C. ドビュッシーの音楽作品から、何か教材のヒントを得ようとしたことに端を発しています。全音音階はドビュッシーが多用した音階ですが、中でもピアノのための前奏曲集第1巻の第2曲《…Voiles》は、ほとんどが全音音階で構成されている曲です。音楽づくりでは、鑑賞教材と創作教材を同期させることが重要でありましょう。そこで、私からの提案としては、ドビュッシーの《…Voiles》をまず授業で取り上げて頂き、生徒たちに全音音階とはいかなるものかを知ってもらった上で、全音音階の音楽づくりに取り組んでもらう、というものでした。そして、その全音音階に基づく、トーンチャイムを用いた音楽づくりのために、2018年の2月に、私は《響きの波紋》という曲を書き下ろしました。

2 Supporter レポート

胃甲征也

リハーサルの段階から先生方の話し合いを聞かせてさせて頂き、どういう流れでよりよい授業を作っていくのかということの間近で見ることができ、とても良い経験になった。即興という難しいテーマの中で、子ども達の反応が心配だったが、それぞれが積極的に取り組む姿が印象的だった。最初の導入の部分で、いきなり演奏に入るのではなく、どういうテーマで何を学び感じて欲しいのかという説明やイメージ付け(ドビュッシーの曲を聴かせるなど)をしっかりとしていくことで子ども達の意欲が高まっていたと感じた。演奏を進めていくときに、教師側が何か新しい動きや使い方を示すと、すぐに子ども達がそれを真似し、応用していく様子を見て、見本を示す教師が非常に重要な役割を持っていると感じた。トーンチャイムだけでなく、様々な他の楽器を使用できるようにしたことで、より楽しんで取り組んでいる様子が見えた。今回のサポートを通して、よりよい授業のためには、子どもを惹き付ける授業の構想とそれだけの準備が必要なのだということが分かった。授業をよりよく進める工夫の重要性も実際に現場にいることで改めて感じる事ができた。今後そういったことを大事にした授業作りができるよう努めていきたい。

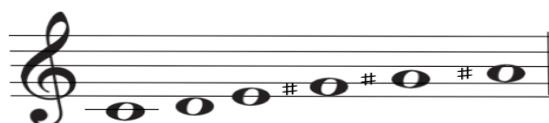


図1 全音音階 例

3 授業への提案

佐藤昌弘

私が作曲した、全音音階に基づくトーンチャイムを用いた音楽づくりのための作品《響きの波紋》(“Ripple of the Sonorities”)は、インストラクションと楽譜に従って即興演奏を行うものです。よって演奏時間は、そのおりの演奏によって異なります。使用楽器ですが、メインはいうまでもなくトーンチャイム(ハンド・ベル)で、全音音階を構成する C、D、E、F#(G♭)、G#(A♭)、B♭(A#)各音の楽器のみを用います(ただし各音のオクターブ開離の選択は自由)。これにヴァイオリン、箏、フルートなどのメロディー担当楽器と、ピアノ、ヴィブラフォンなどハーモニーとドローンを担当する楽器が加わります。奏でられるメロディーとハーモニーは、すべてC音から始まる全音音階で出来ており、ドローンは低いC音のバツ・オスティナートによっています。さらに背景として、さまざまな打楽器を用いて響きに彩りを添えることも可能です。

曲は、10名以上のトーンチャイムを持った奏者たちの演奏から始まります。まず1奏者が最初の1音を鳴らし、さらに別の1奏者がそれを受けて1音を鳴らし、というようにコール&レスポンスの要領で、1音ずつ余韻を大切にしながら、各自のタイミングでゆっくりと響きを受け継ぎ回していきます。これらトーンチャイムによる響きの波紋が続く中、頃合いを見て、ピアノ等によるドローンが静かに導入されますが、ドローンとトーンチャイムはリズムを合わせる必要はありません。そしてトーンチャイムによる響きの波紋とドローンの持続が鳴り続く中、頃合いを見て、今度はピアノ等による和音のオスティナートが加わります。この段階から、トーンチャイムの音の受け継ぎは、スピードと音量を増していくようにし

ます。トーンチャイムによる響きの波紋、ドローンの持続、和音のオスティナートの反復が続く中、頃合いを見て、今度はヴァイオリンなどの旋律担当楽器が加わります。楽譜に書かれたメロディーの3つ断片から、それら自由に選択、反復してフレーズを紡いでいきます。この時点で、すべての楽器が揃ったこととなります。次に、以上の響きの重なりから、頃合いを見て、まず和音のオスティナートが、次にメロディーが演奏を止め、響きの重なりから抜けていきます。その後、トーンチャイムの音の受け継ぎを、最初のときのようなゆっくりとした静かなものへと戻していき、ドローンは収束に向かって音量を弱め、やがて消えていきます。つまりこの曲はあたかも回文のような、不可逆の時間構造を形成するのです。そして最後は、トーンチャイムがテュッティで強奏し、全音音階による偶然の和音が現出させます。その余韻が完全に消えるまで奏者は静止し、音のゆくえを見守って曲を閉じます。

トーンチャイムは、鈴木楽器が製造している楽器ですが、ウェブ上の鈴木楽器のサイトには、楽器について次のようなキャプションがあります。

「トーンチャイムは、ひとりでは演奏できない楽器です。ひとりひとりが自分の音を担当し、グループ全員が一つになった時に、素敵な音楽になります」

(<https://www.suzukimusic.co.jp/information/4817/>) この特性を生かすべく、単音が単音を呼び、それらが一つの円環を成しながら響きの時空間を作っていくような音楽が生まれること、それが作曲のねらいでした。そしてこの曲では、一人一人の奏者が自らの音を出す以上に、他の奏者の音をよく聴くことが求められているのです。

3 Reporter から

Teacher / Reporter 徳田崇（川崎市立南百合丘小学校）

1 授業記録

導入

(1) 前時までの学習の振り返りと全音音階の響きの感受

①「響きの波紋」の学習に先立って学習したドビュッシーの音楽について、Supporter によるピアノ曲（「アラベスク第1番」と「月の光」）の演奏を交えながら振り返り、全音音階について音とともに確認する。

<T>他の作曲家とは違う、ドビュッシーの独特の雰囲気強調する。

<C>実際の演奏の音から全音音階の響きを感じ取る。

②全音音階の音のトーンチャイムをランダムに一本ずつ持ち、一人ずつ順番に鳴らして残った音の響き（増三和音）を感じ取る。

<T>一つ一つがランダムなつながりでも和音として響くことがわかるように、残響に意識を向けさせる。

<C>円形に座った席の順にゆっくり音を出し、響きを楽しむ。

展開

(2) 活動内容の提示と音楽づくり

①「響きの波紋」の構造についてスライドを使って説明し、自分たちがつくる音楽の全体像のイメージをもつ。

<T>トーンチャイムの音が響く中で、ドローンとオスティナートとメロディーが重な

り、即興的に展開していくことを実際の音の例を交えてスライドで説明する。

②7人ずつのグループが中央に出てきて、トーンチャイムで音の受け渡しをする。

<S>7人グループの中に加わって一緒に演奏する。発音の仕方を適度に変化させて、Childrenに刺激を与える。

<C>自分たちの音によってその場に生まれる即興的な響きを楽しむ。

③始め方・終わり方に慣れてきたら、Supporter

と Adviser（今回は演奏者として Supporter の役割も兼ねた）の演奏によるドローン、オスティナート、メロディーも重ねていく。

<S>Supporter 同士で、演奏の分担や刺激の与え方などを相談して、次のグループの演奏に生かす。

<T>Childrenの活動の様子を見ながら、自分も音を出して工夫を促す。

<C>演奏している子も聴いている子も、工夫することで生まれるさらに新しい響きに新鮮な驚きをもつ。

④さらに装飾的な打楽器を加えて、演奏に彩りを添える。

<S>Teacherの動きを見つつ、音楽の展開をさらに豊かにするよう、Childrenを導く。

<C>Supporterに促されて、箏や打楽器の演奏も工夫する。

<T>全体の流れを調整して、終止をつくる。

2 考察

(1) Teacher と Adviser について

楽曲としての安定した構造をもつ一方で、奏者の即興的な発想によって音楽の表れ方が多様に変化するのが、この教材の特徴である。そうした特徴を最大限に生かすために、Teacher としては自身の役割を、学習者の発想を引き出して音楽づくりに生かす Facilitator のような立場として捉えて授業に臨んだ。そして彼らの工夫を言葉ではなく、できるだけ音で促すように意識したことで、多くの場面で Children の主体性を生かした表現が可能になったと考えられる。

また、Adviser は教材の作曲家として授業の計画の段階から深く関わり、詳細に打ち合わせを重ねて授業の構想を Teacher とほぼ完全に共有していた。そうすることで教材曲と授業が極めて自然にフィットした形の指導と学習が実現したことも、この実践の成果と言えよう。

(2) Children について

導入の時点で、Teacher の発言を待つまでもなく「ドビュッシー」や「全音音階」との言葉が Children の方から出てくるなど、本時の学習に向けての意欲は高かった。展開①の場面で活動の見通しがもてて、技能面の不安がない状態で音楽づくりに深く関与できるという期待もあり、②の場面以降は、全員がまさに主体的に学習に向かっていた。そしてその学びに向かう力は、一つのセッションが終わるたびに次はどうか（どうするか）との期待と意欲とともに強くなっていった。そうした学びが実現した要因は、即興的な音楽づくりの学習がもつ一回性からくる興味はもちろん、「響きの波紋」という作品の音楽としての魅力と、教材としての可能性が大きく関わっていると考えてよいだろう。

(3) Supporter について

授業記録にある通り、この授業においては Supporter の Children への関わりが重要な鍵となっている。「響きの波紋」の演奏をする際に、Children が音楽づくりをする中でタイミングを見計らって、新たな発想のきっかけとなる刺激を与えることや、音楽の展開に応じて効果的にドローン、オスティナート、メロディーに変化を加えることなどは、Teacher 一人で適時に対応するのはとても難しい。即興的な音楽づくりでは、音楽の動きの中で音楽の動きとともに奏者の音楽づくりも生み出されていくことが何より大切で、そこからもたらされる心地よい緊張感と高揚感が即興的な音楽づくりの魅力とも言える。綿密な打ち合わせのもと指導の目標を共有した、専門性の高い Supporter が 5 名も関わったことによって、その魅力が存分に生かされ、学習効果は想像を超えて高められていった。

3 まとめ

プロの作曲家である Adviser が授業の構想から深く関わり、教材の作曲まで担ったことと、Supporter に専門性と親しみやすさの両方を兼ね備えた音楽大学の学生 4 名を招いたことによって、今回の事例では TAS モデルの目指す授業の姿とそのよさが無理なく具体化されたと見てよいだろう。その結果、Children の学習は格段に充実することとなった。Adviser の助言によって授業の内容が深まり、Supporter のその場の演奏や Children への関わりによって音楽の質が高まっていく中で、Teacher は授業の展開に合わせて自身の発想の幅を大きく広げることが可能となったのである。

今回の成果をもとに、今後は TAS モデルを臨時の題材ではなく、継続的に年間指導計画に位置付けることも検討課題としていきたい。

【2018. 日本音楽教育学会（岡山）発表】



幼稚園年長児 箏をもとに

Teacher 手呂内幸代, 中山年江

Adviser 早川富美子

Supporter 國學院大學栃木短期大学箏曲部

講師 1 名 学生 10 名

Reporter 藤村秀子

1. Teacher から 学習指導案 (手呂内幸代, 中山年江)
2. Adviser から (早川富美子, 國學院大學栃木短期大学)
3. Reporter から (藤村秀子, 東京成徳短期大学)

年長児 表現遊び指導計画

題材名「箏をもとに」

箏のコンサート

箏の体験

実施日 2018年3月1日

認定こども園國學院大學栃木二杉幼稚園

年長 ほし組 指導者 手呂内幸代

年長 つき組 指導者 中山年江

1 題材の目標

(1) 知識及び技能
箏の音色を知り、
いろいろな演奏の仕
方で表現する。

(2) 思考力、判断力、表現力等
箏の音色を聴き取り、演奏の仕
方によって異なる響きを感じ取り
ながら、いろいろな演奏の仕方を
試し、自分なりに表現する。

(3) 学びに向かう
力、人間性等
箏の音色に親しみ、
箏に興味を関心をも
ったり、自分なりの表
現の仕方を楽しむ。

2 題材の意義（求める内容）

箏は、日本の伝統的な弦楽器中で、ポピュ
ラーなものである。箏にふれることは、日本
の伝統的な楽器に関心をもつことにつな
がる。また、箏は、柱の位置を変えること
によって自由に音高が変化するだけでなく
弦を押ししたり弾いたりするだけではない
奏法も考えられる。したがって、5歳児
の自由な音楽的な発想を引き出すのに、
ふさわしい楽器であり、箏に親しみな
がら5歳児なりの音楽遊びを展開
できる。

3 育てたい園児の姿

ここでは、箏の生演奏を聴くこと
により、箏に対する興味関心をもつ
ようにする。生の演奏にふれ、子
どもがその響きを時空をともにしな
がら感じ取るようにしたい。

その上で、ペアで話をしながら、
どんな音が出せるのか試し、自由な
発想で箏の音を探り、様々な音を紹介
するような姿を目指している。

4 教材について

生演奏の曲は、「さんぽ」「うれしいひなまつり」「園歌」など、園児が日常生活
の中で歌っている曲、並びに「ひらいた ひらいた」「おちやらかほい」「なべなべそ
ぬけ」などのわらべうた、「さくら幻想曲」のような箏曲である。子どもが親しみ
をもったり耳を傾けて聴き入ったりできる曲であり、箏そのものやその音色に
興味関心をもつことができる選曲である。

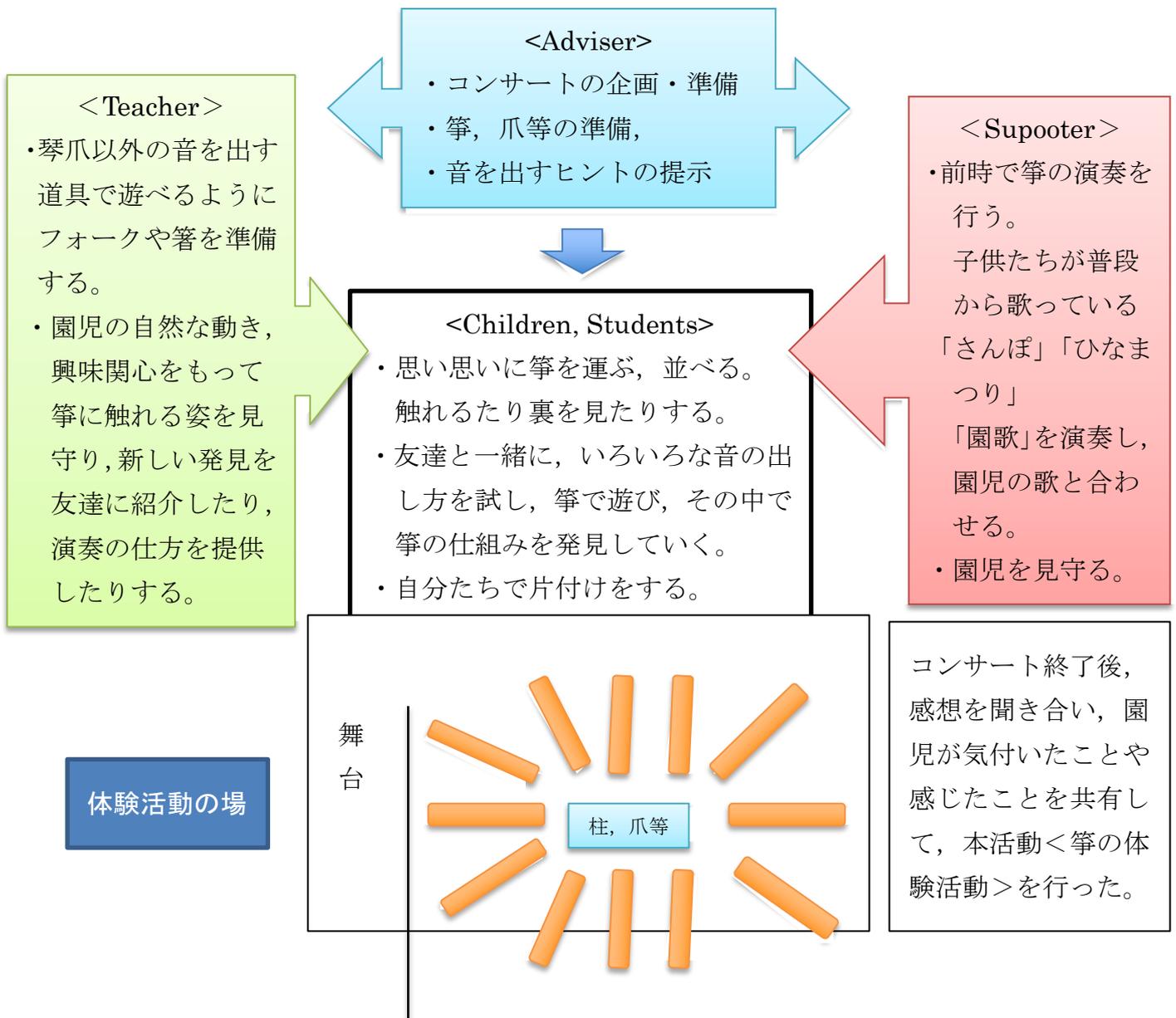
さらに、爪だけではなく、お箸や洗濯バサミなど生活の中にある道具を準備し、
いろいろな音を試しことができるようにした。

5 事前・事後の指導と本時の指導

(1) 事前の活動と実際＜箏のコンサート＞

活動内容	園児の姿	保育者の援助		
<p>○箏の生演奏を聴く。</p> <p><環境構成></p> <table border="1" style="width: 100px; height: 100px;"> <tr> <td style="width: 30px; text-align: center;">舞 台</td> <td style="text-align: center;">年長座る ——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓧ</td> </tr> </table>	舞 台	年長座る ——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓧ	<p>○集団活動への参加の仕方を知り、楽しい気持ちでする。</p> <p>○箏の音色や演奏の仕方に関心をもって聴く。</p> <p>○感じたこと、考えたことを言葉で表現する。</p> <p>○知っている曲に合わせて歌う。</p>	<p>○全園児参加のコンサートであるため、参加の仕方を確認し皆が楽しめるように進行する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園児が発した言葉を取り上げ、箏への興味を深めていくようにする。 ・箏の音色の特徴等について一人一人が感じていることを表情や態度から気付くようにする。 <p>○一人一人の気持ちに寄り添いながら、感動体験を共有していく。</p>
舞 台	年長座る ——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓧ			

(2) 本活動＜箏の体験活動＞

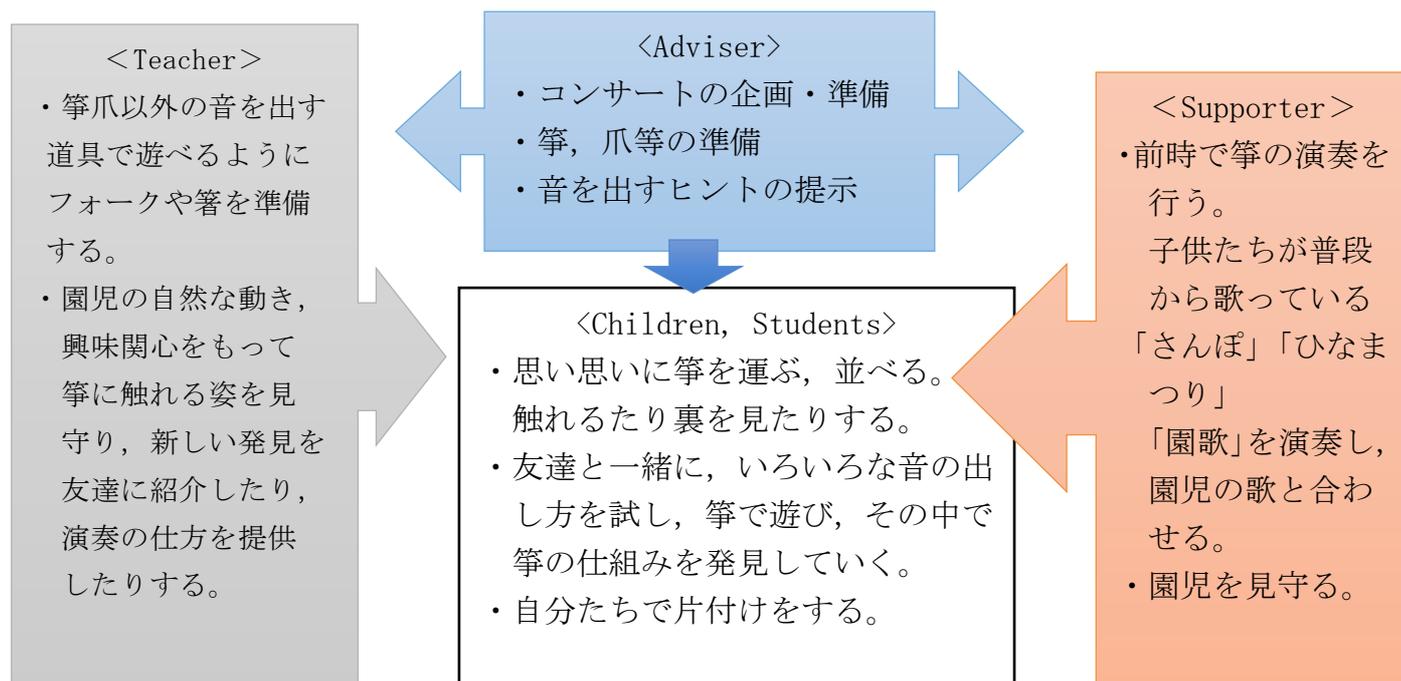


5 事前・事後の指導と本時の指導

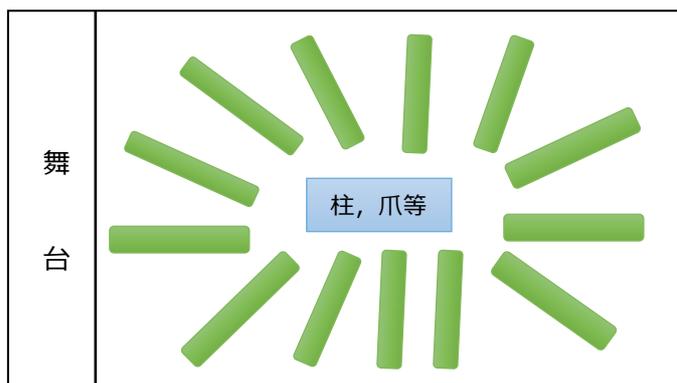
(1) 事前の活動と実際〈箏のコンサート〉

活動内容	児童・生徒の姿	保育者の援助				
○箏の生演奏を聴く。 <環境構成> <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="width: 30px; text-align: center;">舞</td> <td style="text-align: center;">年長座る</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">台</td> <td style="text-align: center;">——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓟ</td> </tr> </table>	舞	年長座る	台	——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓟ	○集団活動への参加の仕方を知り、楽しい気持ちで行う。 ○箏の音色や演奏の仕方に関心をもって聴く。 ○感じたこと、考えたことを言葉で表現する。 ○知っている曲に合わせて歌う。	○全園児参加のコンサートであるため、参加の仕方を確認し皆が楽しめるように進行する。 ・園児が発した言葉を取り上げ、箏への興味を深めていくようにする。 ・箏の音色の特徴等について一人一人が感じていることを表情や態度から気付くようにする。 ○一人一人の気持ちに寄り添いながら、感動体験を共有していく。
舞	年長座る					
台	——年中—— 年小 たんぽぽ Ⓟ					

(2) 本活動〈箏の体験活動〉



体験活動の場



コンサート終了後、感想を聞き合い、園児が気付いたことや感じたことを共有して、本活動〈箏の体験活動〉を行った。

2 Adviser から

Adviser 早川富美子 (國學院大學栃木短期大学)

1 教材の提案

この幼稚園では 2006 年から毎年 1 回、学生による箏コンサート (全園児対象) と箏体験 (年長児対象) を実施している。Adviser は箏曲部の顧問として指導に関わっているため、幼稚園におけるコンサートや体験内容等に関しては、幼稚園と箏曲部の外部講師と連携を取りながら取り組んできた。箏コンサートの演奏曲は、①幼児が歌えて楽しめる②日本の音階③様々な奏法が取り入れられている④季節の歌、の中から演奏する学生の技術でも弾ける曲を選曲した。曲は、「さんぽ」「さくら幻想曲」「わらべうた (ひらいたひらいた、おちゃらかまい、かごめかごめ、なべなべ)」「うれしいひなまつり」「二杉幼稚園園歌」である。

また、2014 年から毎年期間限定で朝の登園後の自由遊びの時間に箏体験を数回実施している。幼稚園のホールに箏を 2 面設置し、伝統的な箏の奏法などによらず幼児の発想を優先し、爪や柱も自由に使用できるようにした。本時に至るまでに、今年度は朝の自由体験を 5 回設定している。そのうち 3 回は、爪や柱以外にモノ (箸、ゴムへら、洗濯ばさみ、プラスチック製のフォークとスプーン、小ほうき等) を設置し、プリペアド箏のように体験できるように設定した。本時の箏コンサートでは Teacher の進行によって幼児がどのように箏を捉えているのか、年長児の体験ではモノを組み合わせることで、幼児の箏体験の可能性を探ることを目的として提案する。

2 Supporter の紹介

本時では、國學院大學栃木短期大学の箏曲部に所属する学生が箏コンサートの演奏と演奏後に実施する年長児全員の体験をサポートしている。箏曲部の学生は、ほとんどが短期大学に入学してから箏に取り組む初心者で、山田流の外部講師による指導のもと週 1 回の練習を行っている。毎年、大学祭や地域の演奏会、そして幼稚園での演奏を主な発表の場として活動している。本時のようにモノを使った年長児の箏体験をサポートするのも初めての経験である。子どもの表現を見守りながら共有できるようにした。以下、Supporter である学生の感想を記す。

コンサートで「さくら幻想曲」を演奏していた時、身を乗り出しながら真剣に聴く Children が目に入った。他の曲とは違い、奏法や箏の音がたくさん重なりあった曲なので緊張感や箏の魅力が伝わったのかもしれない。体験では、Supporter の演奏を真似して口前を叩いてから弾いたり、いろいろな奏法に挑戦し積極的に楽しんでいった。様々なモノを使って、「こうやってみると面白い音が鳴るよ」「これでやってみるとへんな音だよ」と、子ども同士の関わり合いで新たな発見をし、自分の中でさらに発想を膨らませ楽しい発想に繋がれていると思った。両手に箸をもって柱を立てた絃を叩くうちに音の高低差を発見し、「いい音が出た」と打楽器のように即興で演奏。子どもの発想力は驚きの連続だった。

3 授業への提案

本時に至るまで、幼稚園と連携しながら登園後の自由遊びの時間に箏体験を実施してきた。毎年自由遊びの時間に設定しているため、参加はChildren自身の希望によるものである。期間限定ではあるが、この体験の積み重ねにより、自由に柱を立て、爪をつけて弾くと音色が異なったり、柱の移動によって音高が変化したり、弾く場所によって音色が異なることなど、Childrenが箏の特徴を感じ取っている。

今回の実践では、特にモノを使うことで生じる新たな学びやコンサートや体験におけるTeacherの関わりをどのようにしたらよいかをこれまでの実践を踏まえて提案した。

本時は2018年2月13, 14, 19, 20, 27日の5回の朝の自由遊びの実践後3月1日に設定している。本時以後にも3月2日, 19, 20日の3回を計画した。いずれも箏を2面設置し、爪や柱も自由に使えるような環境を整えた。前年度との違いは、爪や柱の他に、モノ（箸、ゴムへら、洗濯ばさみ、プラスチック製のフォークとスプーン、小ほうき等）を3回だけ設置しておき、Childrenの新たな表現に繋げることにした。Adviserは毎回Childrenの活動の様子を見守りながら必要に応じて対応した。Teacherは登園バスの担当や他児の対応等があり、すべて時間に関わることは困難である。AdviserはChildrenの発想や気づきをTeacherに伝え共有しながら体験を支えた。毎回体験の終了時間が近づくとChildrenが柱を全部取り外し、箏を運んで片付けを手伝ってくれた。このような実践経過を踏まえ、本時ではChildrenをよく知る幼稚園Teacherに進行を依頼した。年長児クラスの2人のTeacherは連携を取りながらChildrenの様々な気づきや発した言葉に耳を傾けながら、共有し寄り添っていた。Teacherの進

行により、Childrenにとって日常の生活と変わらず話しやすい雰囲気が生まれた。

またコンサート後の年長児の体験（クラス別に2クラス）では、①箏との関わり（大きさ、重さ、箏の構造、絃、柱、爪等）②モノとの関わり（前項I-1）③箏の音色や奏法④Teacherとの関わり⑤Supporterとの関わり⑥Children同士の関わりを視点としてChildrenの自由な発想が支えられるような内容を提案した。

まず会場準備からChildrenの学びに繋がるようにChildren自身が運んで設定した。箏の大きさや重さ、構造を体感しながら準備から片付けまでをChildrenに任せ、箏1面あたりの人数の制限もしないことにした。Children同士の関わりからも学びに発展していくと考えたからである。そして、朝の自由遊びに参加した一部のChildrenは、プリペアド箏のようにモノを取り入れた体験もしている。その先行経験を土台に年長児全員の体験においても、爪、柱、モノは必要であれば自由に取りに行き行って試すことができるように設定した。Supporterによる演奏をChildrenがどのように受けとめ体験に生かしているか、さらにモノを取り入れることによるChildrenの表現の変化や様々な気づきをSupporterやTeacherが受けとめ、それらを生かし支えながら発展していけるよう提案した。本時では、前年度までのSupporter（学生）主体の取り組みから、TeacherとChildrenが主体となり、Childrenの表現や学びを支えていくことを見ることができた。箏は幼児にとって特別な楽器ではなく様々な可能性を見出すことができる楽器としても有効であると改めて感じた。このような実践が小学校へと繋がっていくことを期待したい。

3. Reporter から

Reporter 藤村 秀子 (東京成徳短期大学)

活動記録

導入

<幼稚園児の経験>

これまでの経緯 (アドバイザー早川先生の資料より抜粋) 國學院大學栃木短期大学箏曲部の学生によるコンサート 2 月末～3 月初旬に実施している。近年は、箏コンサートの前と後の朝の登園後の自由遊びの時間 (8 時半頃～10 時頃) にも、箏を設置して自由に箏に触れる機会をつくってきた。

①前年度 (平成 28 年度) の箏体験

- ・ 3 月 1 日 箏コンサート前の自由遊び
ホール二面の箏を設置。爪、柱は自由。
- ・ 3 月 2 日 箏のコンサートの鑑賞
(曲名) ・さんぽ ・さくら幻想曲
・園歌 ・うれしいひな祭り
・「わらべうた」より
ひらいたひらいた おちゃらか
かごめかごめ なべなべそこぬけ
<コンサート翌日からの自由遊び>
- ・ 3 月 3 日, 7 日 朝の自由遊び
(当時の年長児と一緒に) *柱は自由
- ・ 3 月 17 日 朝の自由遊び
(現在の年長, 年少児と一緒に) *柱は自由
- ・ 3 月 21 日 朝の自由遊び
(現在の年長, 年少児と一緒に)
*箏は一面のみ調弦しておいたが, 最後には
自由に取り外して遊んでいた。
*朝の自由遊びは, 登園バスの時間や園児の興味によって異なるため, 全員ではない。

②平成 29 年度の箏体験

- ・ 2 月 13 日, 14 日 : 箏二面, 柱は自由
- ・ 2 月 19 日, 20 日 : 箏二面, 柱は自由+モノ
- ・ 2 月 27 日 : 箏二面, 柱は自由+モノ

*2 月 27 日は, 年少児も参加していた

<二杉幼稚園の先生方と実践について打合せ>

- ・ 2018 年 1 月 18 日
年長, 年中, 年少の担任の先生方と概略説明
- ・ 2018 年 2 月 28 日
栗原園長先生, つき組担任; 中山年先生
ほし組担任; 手呂内先生
*2 月 13 日, 14 日, 19 日, 20 日, 27 日の
朝の自由遊びの時間にも園児の様子を
できる限り共有

展開

平成 29 年 3 月 1 日 (木) 午前 10 時より, 國學院大學栃木二杉幼稚園ホールにて, 全園児参加の箏コンサートを行い, その後年長児を対象とした箏体験を実施した。

箏コンサートの司会は, 年長ほし組の手呂内先生。演奏は, 國學院大學栃木短期大学箏曲部の学生 7 名と箏曲部講師 1 名が担当した。

演奏曲目は「さんぽ」「さくら幻想曲」「ひらいたひらいた」「かごめかごめ」「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」「うれしいひなまつり」「二杉幼稚園演歌」であった。箏コンサート終了後, 全園児たちは一旦保育室に戻る。

箏体験は, 2 クラスある年長児のみとなり, 前半後半にわかれ, 時間は書く約 30 分程度, クラ

ス別（つき組、ほし組の順）に行われた。

箏体験で用意されていたものは、柱、爪、足（龍手）の他に洗濯バサミ、幼児用箸、プラスチックスプーン、フォーク、調理用フライ返しなどであった（アドバイザー配付資料より抜粋）。つき組、ほし組どちらの園児たちも、自分の指で弦を弾く、または用意されたモノを各自自由に手にして、鳴らしはじめた。弦に洗濯バサミをいくつも挟み、その上を大きなプラスチックスプーンで上から叩く、フライ返しを使ってグリッサンドのように音を鳴らす、または自分が使っていた箏から移動して友達と箏を鳴らす等自由に音を鳴らす姿がみられた。

つき組の男児2名が箏の龍尾を持ち上げ、別の園児一名がスプーンと使って弦を鳴らしはじめると、近くにいたにつき組の担任が駆けつけ、一緒に箏を持ち上げ園児らと一緒に箏の裏側（龍腹）を見はじめた。園児らは、箏を鳴らした時の表と裏の音の違い聞こうとしている様子であった。箏を持ち上げたひとりの園児が、箏の裏側に穴（龍响）が開いていることに気がつき担任に告げると担任は、その園児の気づきを他の園児らに伝え、裏側をしてみるよう提案していた。すると、近くにいた数名の園児が同じように箏の片側を持ち上げ、龍响を確認し、龍响からスプーンを使って弦を弾き、音を鳴らす様子が見られた。

2 考察

(1) Teacher について

つき組、ほし組両先生に共通して思うことは、園児たちに指示を出すことなく、自主性を重んじ、見守るというスタンスを取っていることである。

つき組は保育室に戻った後、休憩後再びホールに入り、箏体験に入った。そのため、箏の設置に関しての話し合い等はしていないと思われる。

ほし組では、箏コンサートが終わり保育室に戻った後（筆者もほし組の園児たちと一緒に保育室に戻る）箏コンサートを鑑賞した感想の発表や箏体験時における箏の置き方について相談する様子を見ることができた。先生が園児たちの意見に耳を傾け、相談しながら決めていた。

(2) Children について

箏体験に参加した年長児（51名。つき組25名ほし組26名）たちは、自ら箏を運ぶ、また爪、柱や龍手などを選び自然に箏を鳴らす様子から、朝の自由時間において箏に触れる機会が有意義に行われていたと考えられる。また、支援が必要だと思われる園児が箏を鳴らしているところに同じクラスの園児らが集まり、先生と共にその音に合わせて歌を歌う姿が見られた。担任と共にクラスの園児たちが箏を鳴らしている園児を思いやる様子がうかがえた。

(3) Supporter について

國學院大學栃木短期大学 箏曲部 講師 1名
学生 7名

箏の演奏はもとより、箏体験において園児たちの中に入り、園児に声をかけたり、園児の様子を観察したり、園児と一緒に事を鳴らす姿が見られた。

國學院大學栃木短期大学

子ども教育フィールド 学生 3名

コンサート、箏体験のビデオ撮影、観察を行い、「ひらいたひらいた」「かごめかごめ」「おちゃらか」「なべなべ」を箏曲部の箏演奏に合わせて歌った。つき組担任の先生も参加し、手あそびをしたところ、多くの園児たちが「かごめかごめ」以外、近くの園児たちと手遊びをする姿が多く見られた。このことから、学生たちのサポー

トが箏コンサートの成功を支えていたといえよう。

3 まとめ

一般的に箏に触れ合うという機会はなかなか得られないと思うが、二杉幼稚園園児たちは、目の前で生演奏を聞き、その演奏に合わせて歌を歌い、わらべ歌で遊ぶ、そして爪や柱、またモノを用いてことを鳴らすという大変貴重な体験をすることができたと思われる。園児たちは、この体験を通して、箏の音色の美しさや身近なものを使ってことを鳴らす、箏で遊ぶ楽しさを味わうことや箏の仕組みを自然と知ることができたのではないと思われる。そして、箏という楽器に出会ったことで、日本の文化に触れるきっかけが作られたのではないかと推測される。

最後にこのような体験の機会をつくられた二杉幼稚園の先生方のご尽力によるものであることはいままでもない。

第1学年 ことばリズムでつくろう
～トガトンを使って～

Teacher 坂野 みどり

Adviser La Verne de la Peña

Supporter 牧野淳子, 小野沢美明子, 永岡和香子,
高須裕美, 古閑美保子, 米野みちよ

Reporter 坪能 由紀子

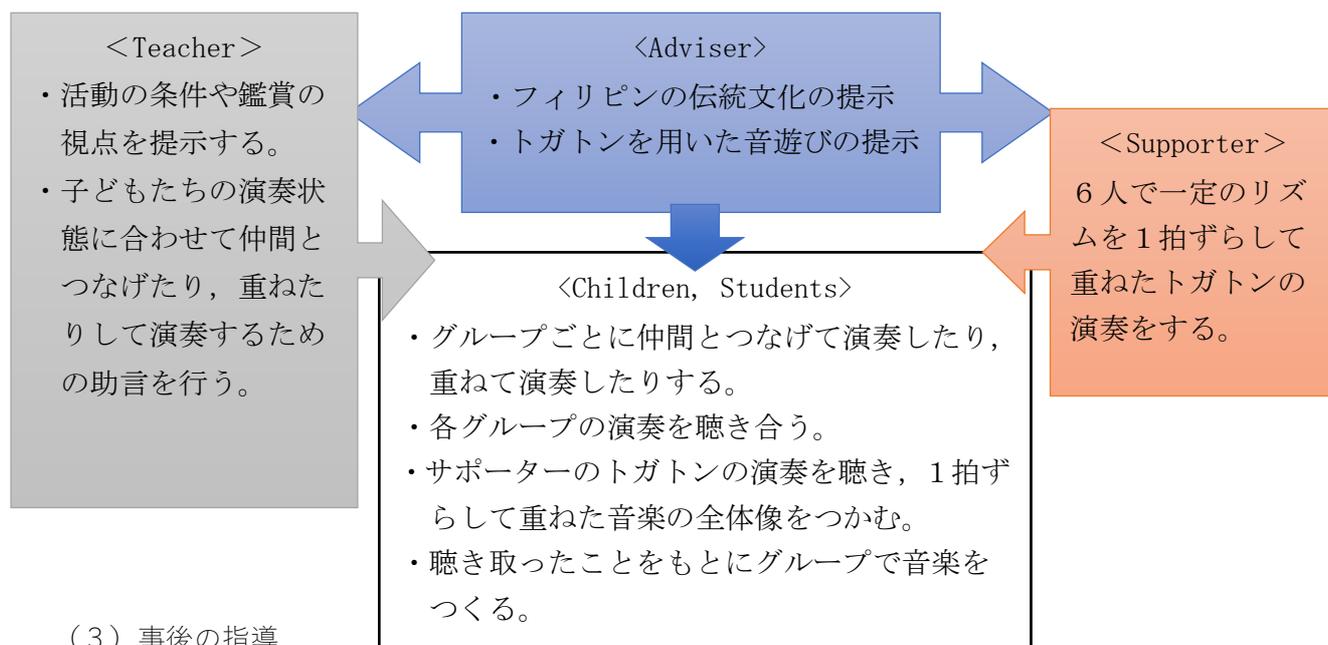
1. Teacher から 学習指導案 (坂野 みどり)
2. Adviser から
(La Verne David de la Peña
University of the Philippines, College of Music)
3. Reporter から (坪能 由紀子, 開智国際大学)

5 事前・事後の指導と本時の指導

(1) 事前の指導と実際

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
<p>○言葉をもとにリズムをつかってトガトンで表現し、仲間とつなげたり重ねたりして演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「と(ま)りや(ま)」の言葉を様々に組み合わせせて言葉リズムをつくる。 ・つくった言葉リズムをもとにトガトンで演奏する。 (※(ま)はクローズ) ・つくったリズムを仲間とつなげたり重ねたりして演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トガトンの奏法に慣れる。 ・言葉の組み合わせからリズムをつくり、トガトンで表現する。 ・仲間とトガトンを使ってつくったリズムをつなげたり重ねたりして演奏する。 ☆仲間とつなげたり重ねたりして演奏できているかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トガトンの奏法を伝える。 ・トガトンで表現が可能な言葉の組み合わせをもとにした様々なリズムを子どもから引き出すようにする。 ・子どもの演奏状態に合わせて口唱歌の活用について助言する。

(2) 本時



(3) 事後の指導

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
<p>○グループで言葉リズムを1拍ずらして重ねて演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに言葉リズムを1拍ずらして重ねた状態を文字譜で示し、互いに聴き合いながら重ねて演奏することで音楽をつくる。 ・各グループの演奏を聴き合い感じ取ったことを伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字譜から1拍ずらした音楽の構成を知り、仲間と重ねて演奏することで生み出される旋律を聴き取りながらグループで演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間と合わせて演奏することに慣れてきたら、口唱歌は使わず、互いに見合い聴き合いながら演奏するように助言する。

2. Adviser から

Cordillera Bamboo Instruments

Adviser La Verne David de la Peña, PhD
Dean
(University of the Philippines, College of Music)

In December of 2017, I was invited to by Dr. Michiyo Yoneno Reyes of the University of Tokyo to present a lecture on Philippine bamboo instruments from the Cordillera in Northern Luzon. The lecture was held at the Institute for Advanced Studies in Asia with the support of the Institute of Creativity in Music Research. To my surprise, I found out that there is a thriving group of bamboo music enthusiasts in Japan, many of whom are educators. I am delighted that this publication partly comes as a result of that pleasant encounter.

Philippine bamboo music presents rich applications in music education for students of all ages and in varieties learning environments. Firstly, it represents a kind of music culture that is democratic and participatory. Because bamboo instruments are for the most part employed in non-ritual contexts in the Cordillera, their use entails no restrictions as compared to gongs (*gangsa*) which are considered sacred. While bamboo percussion applies the same interlocking principles as those used for gongs, it may be played anywhere, anytime, particularly for leisure or entertainment. Unlike gongs which are expensive and considered as heirloom possessions, bamboo is cheap and readily available. Damaged bamboo instruments can be easily replaced, unlike the precious gongs which are brought out only for special occasions.

Many of the rhythmic patterns range from the simple examples that can be learned easily by beginning students, while others may be quite challenging and require more concentration. It is however the interlocking principle that gives these rhythms their distinctive character. The patterns are comprised of 4 to 6 individual parts performed by applying the principle of hocket or rhythmic displacement which take a while to be understood by the beginner. The precise execution produces “resultant melodies” by which the players know they are performing correctly are always a source of pleasure.

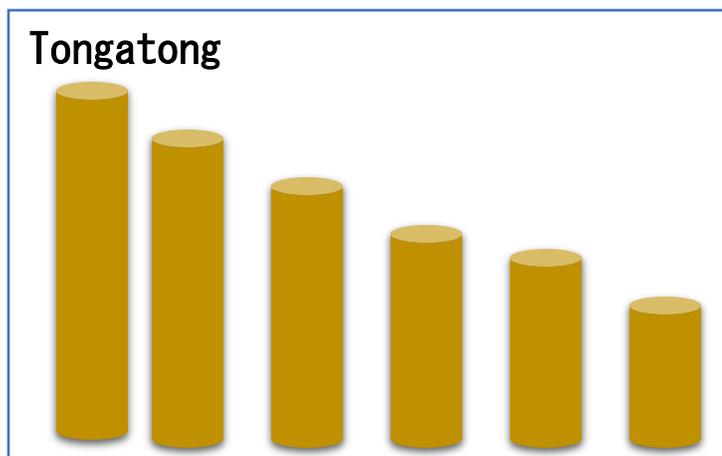
The music gives the learning an alternative concept of meter and melody vastly different from western theories. These rhythmic patterns present a kind of music practice that is not hinged on hierarchies –

each member contributes equally to the ensemble. There are no “stars” who play the most important role and no section is merely for support. The music presents little opportunity for exhibition of individual virtuosity. Instead, group cohesiveness and individual proficiency become the keys to a successful execution. Each member is a soloist, at the same time an accompanist.

Cordillera bamboo music is a fine example of a communal, participatory yet highly fulfilling activity. It is also flexible and adaptable to various situations. The number of members may be doubled, tripled or even bigger. Members need no specialized training in music to participate. When authentic bamboo instruments are not available, these may be easily replaced with any set of materials that produce different pitches. These may be found objects or reproduced substitutes – the possibilities are endless.

Finally, Cordillera bamboo music can inspire creativity. It may be used as the basis for composing new rhythms using the interlocking rhythmic principle. These rhythms can be used in combination with other musical elements such as voice, other instruments or even movement. All manners of presentation are possible – from formal stages to theater in-the-round style where there is no demarcation between performer and audience. The performance can be as simple as a children’s game, or as elaborate as a theater piece.

I am delighted that the Japanese Society for Music Education has taken this initiative to propagate Cordillera bamboo music among Japanese school children. May this dedication to the understanding of world music cultures contribute to better societies and citizens everywhere.



3. Reporter から

Reporter 坪能 由紀子 (開智国際大学)

1 トガトンをめぐる4つの出会い

2017年5月のこと、あるパーティーでスピーチをした私に近寄ってきて声をかけてとくれたのが米野みちよさんだった。話してみると彼女は私と同じ大学・同じ学科(東京芸大楽理科)の後輩で、そしてなんと私も興味をもって30年近く教材化に取り組んできた、フィリピンのルソン島、カリンガ族の音楽をフィールドにしている音楽学の研究者だった。私が「ホセ・マセダさん、って知ってる？」って尋ねると「もちろん！」とのこと。彼女はフィリピン滞在中にマセダさんと知り合い、日本に帰って現在は東大の東文研(東京大学東洋文化研究所)に所属しているとのことであった。フィリピンの音楽、そしてマセダさんめぐる、私たちはすっかり意気投合したのだった。

二人の共通の知り合いであるホセ・マセダさん(1917~2004)、彼はフィリピンを代表する民族音楽研究者であり、作曲家である。私自身は彼とは1991年に私が日本現代音楽協会主催の「東京現代音楽祭」のお手伝いをした時に出会った。日本に招聘されたマセダさんはサントリー・ホールでトガトンを使ったワークショップを行い、コンサートではトガトンを使った彼の作品の中でも有名な「ウドロウドロ」という曲が演奏され、その上、彼は日本の俳句をもとにした作品を書き下ろしてくれたのだった^(註1)。

3つ目の出会いは、2017年12月。東大で行われた、フィリピンの民族音楽をもとにしたワークショップに、米野さんが私と私の友人達を招待してくれた時のことであった。ワークショップを行ったのはLa Verne de la Pena(以下、デラ・ペーニャ)さん、マセダさんの弟子で、やはり民族音楽研究者・作曲家である。そして現在、フィリピン大学音楽学部の学部長を務めている。マセダさんのワークショップから20数年を経て、マセダさんによって紹介されたトガトンのワークショップよりさらに私たちに分かり易い、しかも音楽の本質を損なわない音楽づくりの方法を、デラ・ペーニャさんは教えてくれたのだった。そのうちの1つが「ニナ・ネン・ナー・ネン・ナー・ネン・ナー・ネン」というオノマトペを用いたリズム・パターンであった。

そのデラ・ペーニャさんのワークショップの参加者の一人が、三重県の小学校教員、坂野みどりさんであった。彼女は2017年夏に行われた「新しい音楽教育を考える会」(坪能が主催するInstitute of Creativity in Music Education)において実践を発表し、その席で米野さんとも出会っている。そして、デラ・ペーニャさんのワークショップにも参加し、はじめて出会ったトガトンをもとに実践を行ったのである。

「ことばリズムでつくろう」は、トガトンをめぐるこの4つの偶然の出会いから実現した、授業なのである。

2 ニナ・ネン・ナー・ネン

まずは、授業のもとになったパターンについて、説明しておきたい。これは2017年12月に東大の東文研で行われたデラ・ペーニャさんのワークショップで紹介されたものである。

ニナ・ネン・ナー・ネン・ナー・ネン・ナー・ネン

∞ ○ ● ● ● ● ● ●

譜例1 デラ・ペーニャさんによるトガトンの基本音型

デラ・ペーニャさんは上のようなオノマトペを用いてこのパターンを表した。ニナは8分音符、そして最初の三つの○ (ニナ・ネン) ではトガトンを床に打ち付ける(open)。残りの●ではトガトンの上を指で塞いで床に打ち付ける(close)。

このopen/closeの組み合わせが、トガトンの音楽の第1の特徴である。

もう1つの大きな特徴は各楽器(声部)のズレである。

ニナ・ネン|ナー・ネン|ナー・ネン|ナー・ネン|

∞ ○ | ● ● | ● ● | ● ● |
 | ∞ ○ | ● ● | ● ● | ● ● |
 | ∞ ○ | ● ● | ● ● | ● ● |

譜例2 ずらし方の例1

譜例2のように、最初は各声部が2拍ずつズレて入って行く形を、デラ・ペーニャさんは教えてくれた。次第に慣れてくると譜例3のようになる。

∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●
 ∞ ○ ● ● ● ● ● ●

譜例3 ずらし方の例2

1拍ずつズレることにより、「ニナ」の8分音符が順次移動していく。

open/closeによる音色の変化、そして1拍ズレ、この2つがデラ・ペーニャさんが私たちに伝授し

てくれた、トガトンの音楽の特徴である。さらにはカリンガ族の人たちの演奏を聴いても^(註2)、また先ほど述べたマセダさんのワークショップでも、パターンの形こそ異なっているが、いずれもこのopen/closeの組み合わせ、そしてズレが使われている。つまり、この2つこそが、カリンガ族のトガトンの音楽を特徴づける大きな特徴であると言えるだろう。

3 「とまりやまリズム」の誕生

このワークショップ終了後、ワークショップでの体験や、フィリピンや日本の音楽について話し合う中で、デラ・ペーニャさんに教わった「ニナ・ネン・ナー・ネン」をもとにした授業ができるのではないかという話になった。日本の音楽や子どもたちの遊び歌にもオノマトペを用いたものがあるという共通点から、子どもたちにとって身近にあるものでオノマトペにできるものと考えた時、坂野先生が、「学校の名前はどうか。例えば、私の勤務しているのは泊山小学校、というんですが、その【とまりやま】という言葉を使えばオノマトペができると思うのです。」と言い、彼女は「ま」をcloseにしようと提案した。こうして、トガトンを使った授業が実現したのである。

と | ま | り | や | ま |

○ ● ○ ○ ●

私が参観させていただいた2018年3月9日の授業では、子どもたちがつくり出した音楽を全部聴く場面はなかったが、子どもたちの練習の合間に私が聴き取ったもの、そして後で見せてもらった彼女のノートに記してあったものから、いくつかを紹介しよう。

増やす
と | ま | ま | り | や | ま |
と | ま | と | ま | り | や | ま |
と | ま | や | り | や | ま |

減らす
と | り | や | ま |
と | ま | り | ん (4番目グループが使ったパターン)

順序を変える
と | ま | と | や | ま |
と | ま | り | と | ま | り |
や | ま | ま | と | ま | り (6番目グループが使ったパターン)
や | り | ま | ま |

リズムの工夫
と | ま | り | や | ま |
と | ま | と | や | ま (第2グループが使ったパターン)
とっ | とと | と | ま | り | や | ま

こうしてできた「ことばリズム」を用いて、その後の授業は次のような流れになった。

①各グループで1つを「とまりやまリズム」からえらぶ



②それをトガトンで演奏・繰り返す・重ねる



③一人ずつズラす

4 ズラすのは難しい！

彼女はもう1つの要素「ズレ」を前もって体験させていた。それを「なべなべそこぬけ」や「かえるのうた」などの子どもたちの馴染みの歌でやってみたのである。いわゆるカノンになるわけだが、「なべなべ」の方は1拍ズレでも子どもたちはできるようになったとのことであり、かなり複雑なズレの、面白い音楽ができたのではないかと思う。

しかし、自分たちがつくり、選んだ「とまりやまりズム」をトガトンでやるとなると、これはかなりの難関のようであった。

私の参観した授業でも、どのグループも懸命にトガトンを打ち鳴らし、教室には30数本のトガトンの音が重なり合うため、練習を目の前で見てさえ、ちゃんとズレているかどうかの判別は難しい。でもどうもどのグループもうまくいっていないような気がする。トガトンのパターンがズレるとどういう現象を生むのかを実感できていないようなのである……。ここまでを見た時、「これって一体この先、どうなるんだろう？」という不安がよぎったというのが、私の正直な感想だった。

5 サポーターの登場とその生の音

そこへ登場したのが6人の大人たちである。この時授業を参観にきていた人たちのうち、6人が教室の前に並んで、トガトンの演奏を始めた(資料1)。子どもたちはあつという間に6人を取り囲む。これじゃあ演奏家に触るんじゃないか、というくらい顔を演奏家に近づける子どももいる。夢中になって演奏に聞き入っているのがわかる。演奏の途中で子どもたちは次々と手を挙げていく、トガトンのパターンの「ズレ」とはどのようなものか理解したのだ。

「はい、いちズレ！」というのは1拍のズレということがわかった子どもたち。「にズレ」と叫んだのは、最初の拍に8分音符で2つ音が入っていたことに着目した子だ。諸説出て来たが、最終的には全員の子どもたちが、サポーターの演奏が1拍ずれていたことに納得したのであった。

6 子どもたちの作品

最後に、次の時間に完成した子どもたちの6つの作品の中から3つを選んで紹介したい(譜例4)。もともとなる格子になった楽譜は坂野先生が考案し、そこに子どもたちが自分たちの音楽を書き込んだものを、再び坂野先生が清書してくれたものである。この楽譜を見ながら、子どもたちが切磋琢磨の末に、授業の最後につくった作品(資料2)を聴いていただければと思う！

ことば【と・ま・とや・ま】 2 番目グループ

	1	2	3	4							
①	と	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま	と	ま	とや
②	ま	と	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま	と	ま
③	とや	ま	と	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま	と
④	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま
⑤	と	ま	とや	ま	と	ま	とや	ま	と	ま	とや

ことば【と・ま・り・ん】 4 番目グループ

	1	2	3	4							
①	と	ま	り	ん	と	ま	り	ん	と	ま	り
②	ん	と	ま	り	ん	と	ま	り	ん	と	ま
③	り	ん	と	ま	り	ん	と	ま	り	ん	と
④	ま	り	ん	と	ま	り	ん	と	ま	り	ん
⑤	と	ま	り	ん	と	ま	り	ん	と	ま	り

ことば【や・ま・ま・と・ま・り】 6 番目グループ

	1	2	3	4	5	6					
①	や	ま	ま	と	ま	り	や	ま	ま	と	ま
②	り	や	ま	ま	と	ま	り	や	ま	ま	と
③	ま	り	や	ま	ま	と	ま	り	や	ま	ま
④	と	ま	り	や	ま	ま	と	ま	り	や	ま
⑤	ま	と	ま	り	や	ま	ま	と	ま	り	や

譜例4 子どもたちの作品

注1：東京現代音楽祭「童楽」（サントリーホール）1991

注2：「世界民族音楽大系4」日本ビクター，1988

注3：「音楽をつくる・音楽を聴く」日本コロムビア，2012，COCE-37054-6。ホセ・マセダ「しずかさや〜芭蕉の俳句による」はマセダさんの母国フィリピンでは知られていなかったが，2017年にデラ・ペーニャさんに会った時この曲の話になり，彼に楽譜と音源を贈った。現在はユニセフの「ホセ・マセダ資料室」に保管されているという。

資料1 動画：6人のサポーターによる「ニナネン・ナーネン」の試奏

資料1：6人のサポーターによるトガトンの演奏

授業当日、名古屋付近はもちろん、東京、栃木など関東近辺、京都、そして佐賀県などからの参観者があった。授業者の坂野先生もそして1年生の子どもたちも、トガトンにふれるのははじめてだったので、筆者（坪能）は授業の始まる直前に、参観者のうち6人に声をかけて、授業中、デ・ラ・ペーニャさんに教わったパターンをこの6人で演奏してみるというアイデアを持ちかけた。1人目は「竹の音楽」について博士論文を書いた牧野淳子さん（元京都芸術大学）、そして6人目は、フィリピン音楽の研究者である米野みちよさん（東京大学）である。その二人の間に、若手の音楽教育学研究者が4人加わるという強力メンバーであった。

資料2 音源：3グループの子どもたちによる、トガトンのための作品

第4学年 さくらさくらを広げよう

Teacher 村越江利子

Adviser 吉原佐知子

Supporter 吉原佐知子

Reporter 早川富美子

1. Teacher から 学習指導案 (村越江利子)
2. Adviser/Supporter から (吉原佐知子・箏演奏家)
3. Reporter から (早川富美子・

國學院大學栃木短期大学)

1. Teacher から 学習指導案

第5学年「さくらさくらを広げよう」

歌唱曲「さくらさくら」

鑑賞曲「さくら変奏曲」 箏曲「鳥のように」

実施日 2018年 6月 20日

千葉市立磯辺小学校 第5学年

授業者 村越 江利子

1 題材の目標

○日本の音階でつくられた音楽のよさや面白さを感じ取りながら、音楽を聴いたり音楽の仕組みを生かして音楽をつくったりすることができる。

○日本の音階でつくられた音楽を味わって聴いたり、箏の奏法や音楽の仕組みを生かしながら旋律をつくり、つなげ方や重ね方を工夫して、どのような音楽にするかについて思いや意図をもったりする。

○日本の音階でつくられた音楽のよさや面白さを感じ取りながら、箏の奏法や音楽の仕組みを試して旋律をつくり、つなげ方や重ね方を工夫して、まとまりのある音楽をつくることに意欲的に取り組む。

2 題材の意義

日本の音階の1つである都節音階を使った音楽を歌唱曲「さくらさくら」Supporterが演奏する「さくらによる変奏曲」をもとに、そのよさや面白さを見出し、箏を使って音楽をつくる。様々な奏法や音楽の仕組みを使ってつくった曲を、友達と試しながらつないだり、役割を決めて重ねたりしながらまとまりのある音楽にしていく。日本の音楽の特徴をしっかりと感じながら、音楽をつくる喜びを味わうようにしていきたい。

3 育てたい児童・生徒の姿

思いや意図をもち、意見を交しながら音楽をつくる活動に消極的な児童が少なくない。また、つくった旋律をつないだり重ねたりして「音楽に構成する」経験が少ない。

そこで、技能差がなく5音が全て隣り合わせに並ぶ、「箏」を使った日本の音階の音楽づくりをする。その響きを感じながらつくった音楽を、Supporterや教師のアドバイスと音楽の仕組みをたよりに、友達と協働して、日本の音楽のよさや面白さの感じられる1曲にまとめ上げられるようにしたい。

4 教材について

「さくらさくら」日本古謡

明治21年に、文部音楽取調掛が編集し、東京音楽学校が発行した「箏曲集」に初めて収められた。現在の教科書の歌詞は、昭和16年、口語体に改作されたもの。旋律が五音音階でつくられており、歌詞の内容とも合わさって、日本の音楽の特徴を感じ取りやすい。

「さくら変奏曲」宮城道雄 作曲

大正12年に「さくらさくら」を主題とした変奏曲になっており、本来箏の三重奏によって演奏される。曲は主題と七つの変奏からなっており、演奏の仕方にも工夫が凝らされている。

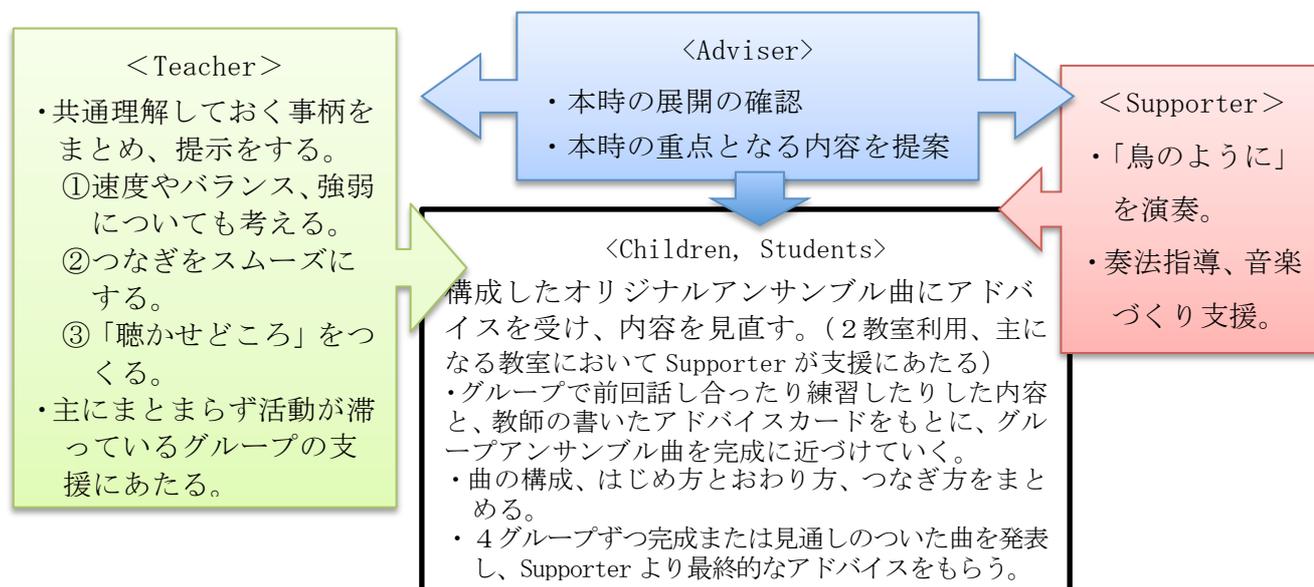
5 事前・事後の指導と本時の指導

5 事前・事後の指導と本時の指導

(1) 事前の指導と実際 (◎は Adviser 兼 Supporter 来校)

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
○「さくらさくら」を歌い、日本の伝統的な音楽の雰囲気味わう。	・桜の情景を思い出し、曲想にあった歌い方で「さくらさくら」を歌う。 ・もとは箏の曲であることを知り、箏について各部分の名称などを知ることにより興味を持つ。	・範唱から曲想を捉えた楽曲のよさを生かし、柔らかい歌声で歌うように助言する。 ・次時からの学習に生かすため、各名称を覚えるよう伝える。
○日本の音階の特徴を感じ取りながら、箏の演奏ができるようにする。	・楽譜で階名を確認しながら、曲の特徴を知る。 ・縦譜を読み、「さくらさくら」を練習する。	・箏のタブ譜を利用して、曲の特徴が捉えやすいように提示する。 ・基本的な姿勢や奏法は、個々に支援する。
○「さくらさくら」をもとに、オリジナル「さくらさくら」づくりのアイデアを出し合う。	・箏で弾きながら、「さくらさくら」の日本らしさ、桜らしさについて感じたことを発表し合う。 ・各自のオリジナルの「さくらさくら」づくりの、アイデアを出し合う。	・基本の「さくらさくら」は全員がほぼできる状態になるよう、支援する。 ・前時の内容をテレビで提示する。
◎ Supporter の演奏や教わった奏法をもとに表現の幅を広げる。	・「さくら変奏曲」の演奏を鑑賞する。 ・10種類の奏法を使い方も交えて知り練習する。	・Supporter は T ₁ として、教師は個々の技能面での支援にあたる。
○グループでのイメージを手がかりに、各自が、オリジナル「さくらさくら」をつくる。	・自分の選んだアイデアもとに、即興的に旋律をつくり、3人(旋律、低音、オスティナート)ずつ、アンサンブルを試す。 ・様々な奏法を加えて、各自オリジナル曲をつくる。	・アンサンブルをする機会が増えるように、3人に1面を使用し交代で即興をするようにする。 ・学習した奏法を必ず使うことを伝える。
◎ Supporter や教師のアドバイスをもとに、グループでオリジナル曲を構成する。	・役割や順番を試奏しながら決め、アドバイスを参考にしてグループアンサンブル曲をつくる。 ・構成の仕方を確認し、それぞれの間の連結の仕方も大切なことを伝えていく。	・それぞれのグループの音楽のよさを価値づけたり、困っているグループの助言をしたりする。(事前の活動より助言カードを作成)

(2) 本時 (Adviser は Supporter を兼ねる)



(3) 事後の指導

学習内容	児童・生徒の姿	教師の働きかけ
○つくった曲を通して、箏の音色の特徴や美しさや、グループでつくって演奏する楽しさを伝える。	・担任や4年生を招待して発表会をする。	・招待される4年生に鑑賞カードを渡し、発表曲のよさが伝わりやすくする。

2 Adviser から

Adviser / Supporter 吉原佐知子
(箏演奏家)

1 教材の提案

今回、授業で使う箏は、日本を代表する伝統的な楽器であるだけでなく、音楽づくりにも大変有効な楽器である。調弦を自在に変えることが出来、使いたい音だけ拾って調弦すれば自在に絃をかき鳴らしながらメロディーや伴奏を即興的につくり出すことが出来る。また、箏の素材である、桐の木を響かせた独特の音色も魅力のひとつであり、多彩な奏法により音色が千差万別である。爪で弾いたり、指ではじいたり、余韻をゆらしたりと、たくさんの奏法があるが、どれも少しずつ音色の変化がある。子どもが独自の奏法を考えて重ねても違和感なく音楽が出来る。

このように簡単に音が出せ、様々な音色が出せる箏だからこそ幅広い音楽づくりが可能なのである。

また、今回の教材である「さくら」は箏の練習曲のために作られたとも言われるほど簡単にメロディーを弾くことが出来る。箏の一番代表的な調弦である平調子(ひらちょうし)で七絃からスタートしてほとんど絃を飛ばずに隣の絃に行ったり来たりすれば可能である。日本独特の都節音階(平調子)に親しみ、有名な日本古謡である「さくら」を題材に、様々な奏法や旋律を重ねて箏の豊かな音色を味わいながら演奏する体験は、子どもたちにとって生涯の宝物になるであろう。

2 Supporter の紹介

吉原 佐知子(箏演奏家)

平成14年、東京藝術大学邦楽科生田流箏曲専攻卒業。NHK 邦楽技能者育成会第43期卒業。現代邦楽研究所第1期卒業。同所にてビクター邦楽技能者育英賞受賞。全国高校生邦楽コンクール準優賞。賢順記念全国箏曲コンクール銅賞、奨励賞受賞。NHK オーディション合格。

2010年 旧東京音楽学校奏楽堂にてリサイタル開催。

2015年 洗足学園音楽大学にて「吉原佐知子 箏リサイタル〜箏独奏の系譜」開催(文化庁芸術祭参加公演)

2015年 フランス サンリキエ音楽祭にて招待演奏

研究論文

「音楽づくりにみる箏の教材化の可能性について-邦楽ワークショップ授業の分析を通して-」

2013年、洗足論叢第42号

主な著書

「和楽器にチャレンジ箏」(汐文社出版) 執筆担当。

「音楽づくりのアイデアII」(マザーアース出版)。

現在

洗足学園音楽大学 現代邦楽コース非常勤講師

熊本大学 教育学部音楽科非常勤講師

東京都市大学等々力中学高等学校 箏曲部非常勤講師

3 授業への提案

今回の授業は3回サポーターとして参加した。サポーターとして支援、演奏したこと、アドバイザーとして提案したことは以下である。

1回目(4/9)

- ・「さくら」藤井凡大編曲を演奏し、様々な奏法によるさくらの変奏曲を子どもに聴かせる。
- ・様々な奏法を教える
かき爪、あと押し、つき色、輪連、うち爪、引き連、合わせ爪、すくい爪、ピチカート、など。
- ・子どもたちも色々な奏法をやってみて、まわって個別に指導する。

2回目(7/9)

- ・グループにわかれてつくる導入のアドバイス
- ・旋律、低音の伴奏、かざり(合いの手、打楽器的奏法、副旋律など)のそれぞれの役割や特殊奏法(技)をつかって村越先生と重ねて模範演奏する。
- ・実際に子どもたちがグループでつくっている中をまわり、アドバイスする。
- ・何をすればよいかわからず困っている子どもには、メロディー、伴奏、かざりのどれをやってみたいか聞いてアドバイスをする。
- ・良いところやもっと工夫できるところをアドバイスする。

3回目(8/9)

- ・箏の現代曲である沢井忠夫作曲「鳥のように」を演奏し、様々な奏法(技)や、拍の揺れや間が織りなす表情豊かな箏の音色を

味わわせる。

- ・子どもがうたう「さくらさくら」に合わせて、吉原がアドリブで伴奏をしてみせる。
- ・自分たちでみつけた独自の奏法(紙で絃をこすとか、鉛筆で色々な所をたたくなどのプリペアド箏のような奏法)もいれても良いとアドバイスする。
- ・子どもたちがつくっている途中で、こんな奏法もあるよ、などのアドバイス。
- ・間違いはないので怖がらずに、たくさん音をだして、重ねてごらんとアドバイス。
- ・強弱の工夫や音のないところもあっても素敵とアドバイス。
- ・発表したグループの作品を聴いて、良かったところや工夫しているところを言う。
- ・たくさん場面があって、どのグループも長すぎるのもう少しコンパクトにまとめた方がよい、とアドバイス。
- ・よく聴き合うのが一番のルール、という。

「鳥のように」解説

1985年 沢井忠夫作曲

鳥のように大空を翔けることが出来たら…という夢は誰もが持っている。それは普段、意識の底に眠っているが、何かのきっかけで時折目覚める。例えば、憧れの時、よろこびの時、それは心を満たし、大空を漂う、鳥のように。(作曲者)

3. Reporter から

Reporter 早川富美子（國學院大學栃木短期大学）

1 授業記録

導入

（1）常時的な活動

- ①Supporter による現代箏曲「鳥のように」の演奏を鑑賞する。
- <T>箏の様々な表現の仕方、音色等を良く聴き、音楽づくりに生かすように促す。演奏者の手元がよく見える場所で鑑賞するように促す。
- <S>曲名、作曲者、楽曲説明、選曲理由、鑑賞ポイント（強弱や速さの変化、弾く場所による音色の違い、旋律と伴奏を一人で弾く、既習した奏法が曲に取り入れられている等）を伝えてから演奏する。
- <C>曲に合わせて体でリズムを取る、奏者の様々な奏法を真似するなど、身を乗り出しながら鑑賞する。
- ②鑑賞後、Teacher はChildren の気づきを捉え、Supporter が部分的に弾きながら共有する。
- <C>指を使った奏法、音を消す、叩く場所による音色の違いなどを述べる。
- <T>気になった特殊奏法をSupporter に再度依頼する。
- <S>竜角のところを弾く、消爪、裏をこする等、弾きながら示す。ダメなことではないので、いろいろ試しながらグループでの音楽づくりに生かすようにアドバイスする。
- <S>児童の気づきを取りあげ、その部分を弾きながら、音楽づくりに生かすよう促す。

展開

（2）本時の中心的な活動

- ①本時のめあてを確認し、音楽室と他教室の2教室に分散して音楽づくりをする。
- <C>鑑賞で学んだ奏法を試すなど、前時までの取り組みを生かして練習する。
- <T>各グループの様子を観察しながら、バランス、強弱、構成等に意識を向けるようアドバイスする。
- ②参観者の介入により、鉛筆、紙、定規などの道具を使って新たな音探しをする。
- <C>鉛筆で絃を叩く、紙やクリップを挟んで絃を弾く、調弦を変える、鉛筆をバチのようにして絃を叩くなど新たな音探しをする。
- <S>児童が新しく探した音をグループで順番に発表し、即興演奏で支える。
- <S>道具を使った音探しも、グループでの音楽づくりに取り入れるようにアドバイスをする。
- ③Supporter の演奏で「千本桜」と「さくらさくら」を歌いながら、箏の可能性を知る。
- <S>曲によって調弦を変えることを伝え演奏する。
- <T>箏の「千本桜」の演奏にカホンでリズムを入れてSupporter とコラボする。
- <C>手拍子を入れながら歌ったり、ジャンル異なる曲を歌う。

2 考察

(1) Teacher について

Teacher は音楽専科であり、日頃から様々な指導内容において Children の興味関心を引き出しながら、音楽に親しめる工夫を重ねている。本時においても、詳細な指導計画のもと学習内容が積み重ねられていることが、音楽室内の掲示物やあらゆる場面での Children の表現に見ることができた。本題材では Supporter を招聘するまでに、「さくらさくら」の歌唱、日本の音階や曲の構造の学習を行い、箏の基本的な奏法を習得しながら、主旋律と伴奏を「重ねる」学習を行っている。そして、Supporter の支援のもとにグループでオリジナル曲をつくることに繋げている。本時の中心的な活動では、Supporter が音楽室、Teacher が他教室に分かれ、各4グループの指導をしていた。互いに音を聴き合える環境設定を考慮するとやむを得ないと思われるが、Supporter が主導している感が否めず、Teacher との協働的な指導場面が捉えにくかったのが残念である。

(2) Children について

本題材に取り組む児童は、前年度に「箏に親しもう」(2時間扱い)の学習に取り組んでいる。5年生になり、本題材では本時を含めて Supporter から3回指導を受けている。Children 同士のコミュニケーションも良好であり、箏に興味をもち、様々な奏法を試したいという Children が多い。どのクラスの Children も箏の基礎的な技能が高く、意欲的に取り組んでいる様子が随所に現れていた。導入における Supporter の演奏では、身を乗り出して音楽に合わせて体を動かしたり、奏法を真似しながら聴いている姿が印象的であった。

本時の中心的な活動において参観者が1クラスだけ道具を活用した音探しのきっかけをつくっ

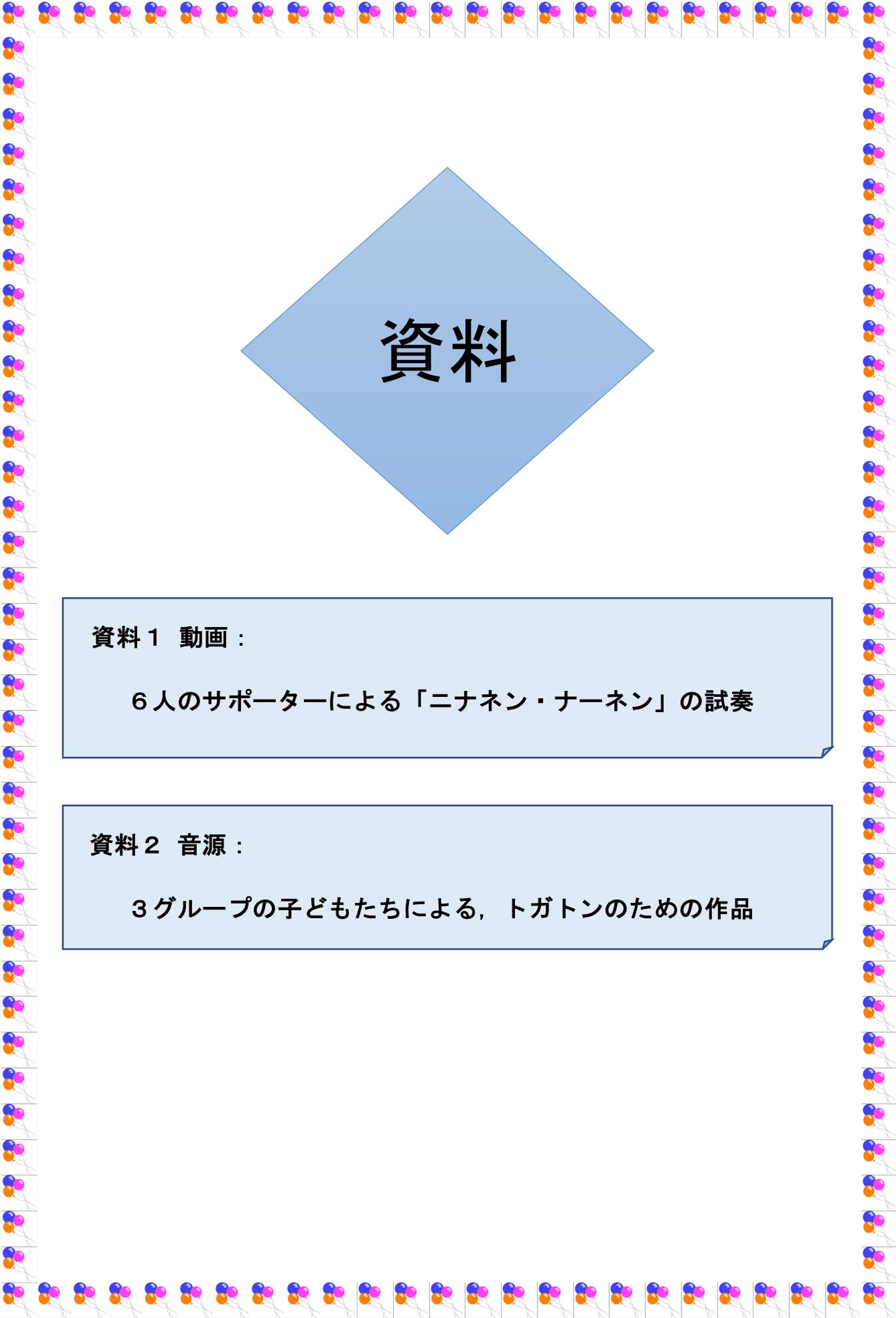
た。Children はすぐに反応を示し、柱の移動や箏の様々な場所を弾いたり叩いたり、道具を用いて生き生きと音探しを始めた。この新たな音探しを次の発表に向けて取り入れると面白いとの Supporter のアドバイスも受けたが、本時以降の発表映像から分析すると、あまり生かされていなかった。これは、本時までどのグループもある程度の音楽づくりができていたためと思われる。そのため Children は Teacher や Supporter からアドバイスを受けても、各自弾きたいという欲求が強く、曲を短くしたりするというのは、どのグループも抵抗があったのではないかと考察する。

(3) Supporter について

本題材では、5年生3クラスの箏の基礎的な奏法や特殊奏法の指導、題材に関連する鑑賞曲の演奏や音楽づくりのアドバイス等を行った。本時では新しい音探しをしたグループを「さくらさくら」をもとにした即興で支えながら、その発表をさせていた。しかし、本時以後の発表にはあまり生かされていなかった。Supporter が2回目に来校して指導した時に、基礎的な奏法の習得の他に、Children が自ら音探しをする場面を設定したら、本時の展開がさらに広がっていったのではないかと考える。

3 まとめ

本事例は、Supporter との協働による取組により、箏の多彩な表現や音色を楽しみ、箏に対する見方や聴き方、捉え方が変化していったのではないかとと思われる。しかし、Supporter と Teacher が分担して指導する場面が多く、そのバランスが今後の課題であろう。Children が様々な奏法を探し楽しみながら音楽づくりができると、さらに箏の可能性が広がるのではないだろうか。



資料

資料1 動画：

6人のサポーターによる「ニナネン・ナーネン」の試奏

資料2 音源：

3グループの子どもたちによる、トガトンのための作品

音楽の授業づくりジャーナル 第2号

音楽の授業づくりジャーナル編集委員会

編集長 : 石上 則子 (元・東京学芸大学)

編集委員 : 味府 美香 (東京成徳大学)

駒 久美子 (千葉大学)

坪能由紀子 (開智国際大学)

ISSN : 2433-6610

出版 : 新しい音楽教育を考える会

Institute of Creativity in Music Education

2019年6月発行

1. Teacher から 学習指導案

第1学年「ことばリズムでつくろう」

鑑賞曲 サポーターによるトガトンの演奏 実施日 2018年 3月9日

三重県四日市市立泊山小学校第1学年

授業者 坂野みどり

1 題材の目標

○トガトンの奏法を知り、設定した条件に基づいて言葉の組合せでリズムをつくり、仲間とつないだり重ねたりして音楽を即興的につくる。

○決められた拍数の中で音楽をつくったり、仲間と音をつなげたり重ねたりして演奏するために、言葉や音の組み合わせや数を工夫する。

○言葉が音になる面白さや仲間と合わせることで生み出される音楽を感じ取り、リズムづくりや演奏する活動に仲間と関わりながら主体的に取り組む。

2 題材の意義

フィリピンの伝統楽器であるトガトンの音楽には、言葉を用いた音遊びの中に口唱歌が認められる。これは日本の子どもたちの日常生活の中にある音楽にも見られるものである。

小学校1年生の子どもたちが言葉からのアプローチによりリズムを感得し、自分の音楽を仲間とつなげたり重ねたりすることで音楽をつくる楽しさを味わうようにしたい。

3 育てたい児童・生徒の姿

音楽づくりでは、決められた拍数の中で即興的にリズムを打ったり自分の身体から出る音を仲間とつなげたり重ねたりして演奏する経験をしてきている。

ここでは、言葉の組み合わせをもとにリズムをつくり、トガトンで音に置き換えることでリズムを工夫し、つくったものを仲間とつなげたり重ねたりして演奏することで音楽をつくる楽しさを感じ取るようにしたい。

4 教材について

フィリピンのカリンガ族の伝統楽器「トガトン」と伝統音楽

トガトンは竹筒の口を手で開け閉めしながら硬いものに打ち付けることで二つの音が出るフィリピンの伝統楽器である。複数の人員でリズムパターンを1拍ずらして奏することで旋律とドローンが生み出されている。奏法が簡易であることや口唱歌があることから、子どもたちが遊びの感覚を持って音楽をつくり出すことができると考えた。言葉の組み合わせからリズムをつくり、トガトンで仲間と重ねて演奏することで旋律とドローンのある音楽をつくり出す楽しさを味わえるようにする。